
The End Of Contract

新・焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The End Of Contract

【Nコード】

N3290K

【作者名】

新・焰

【あらすじ】

私のせいだ。九年ぶりに再会した幼馴染が、化物になってしまった。それも全部、私のせい。私が彼を縛ってしまったから。離れていた九年。一体彼の身に、何が起ったの？——ねえ私達、昔みたいにな、ずっと一緒にいられるの？とある田舎町の幼稚園。事の始まりは、年長組の少年が幼馴染の少女が巻き込まれた事件に激怒し、事件を終わらせる。そのまま幼稚園を卒業した少年は、憤怒した自分を自己嫌悪し、彼女から離れ、都会の小学校に入学した。時は流れ、九年後の春。少年と少女は再会する。しかし、久しぶり

に再会した少年は途轍もない変異を見せ、彼女を驚愕させた。

少年は、契約者として帰って来たのだ。

――

始まりの繋がり——— 幼い少年と少女

「零^{レイ}ちゃん」

と、声がした。よく知る声だ。

声は幼い女の子によるソプラノの音色で、無邪気さがよく解る。

幼い女の子はよく知る子だった。幼稚園からの付き合いで、年少組の時に会った。当時の彼女は年少組のリーダーのような存在で、男子にも負けない腕力を誇る———と言っても、喧嘩限定だが———

———まさに当時の女子の憧れの存在だったのだ。

そして自分は男子だった。当時は大人しく、女子に似た目鼻立ちから周りの男子に怪訝に思われ、数々の嫌がらせを受けた。

しかし何故に、そのような自分に女子のリーダーが馴れ馴れしくしてくるのだろう。疑問に思えた。

偽善か？今思えばそう自嘲するだろう。

当時その女子の家は自分の家と近かった。それもあり、その女子は幼稚園に入園する前から自分の顔は知っている。自分もその女子の顔は知っていた。つまり、幼馴染なのだ。幼稚園に入園する前は数回会って遊んだこともある。

昔からの顔馴染みであるその彼女は、その誼で自分を虐めっ子からすぐに救い上げてくれた。偽善ではない。ただ純粹な怒りを感じただけなのだ。女子の友達なら沢山いる。しかし男子の目の敵にされている故、男子の友達は少ない。そんな彼女は少ない男子友達を馬鹿にされて憤怒した。

彼女の男子に対しての制裁は酷いものだった。一週間、その男子限定に周りの女子に命令したのだ。

「あの子は敵だ。一週間、無視して」

その一言に、年少組の女子全員が従った。それは彼女の人望が厚いから故、成せる業なのだ。

そして実行。まさにその男子は孤独となった。女子から無視され、その異様な雰囲気から男子にも疎まれ、相手にされなくなった。

その男子は結局、訳も解らず孤独となり、結局は先生に泣き付いて終わった。

それ程恐ろしいことを成せるのだ。三歳にして畏怖を覚えさせられた。

それからのことだ。自分は彼女のただ一人の男子としての友達となつてしまつた。

虐めっ子を逆に虐めてしまったことで周囲の男子には脅威の対象として見られ、彼女は男子に相手にされなくなつてしまつたのだ。

しかしそれでも彼女はめげず、逆に臭い物が寄らなくなつたことに清々したのか、笑顔が増えた。彼女の周りには同じ女子の友達が沢山いる。その中に自分が入るのだ。元々女子に似た顔をしているのか、女子は周囲の男子とは違う目で自分を見た。ピンクの可愛らしいリボンを持つて来ては、まだ上手く扱えない手付きで自分の髪に結び、彼女に見せた。まるで玩具の様な扱いだが、自分はそれに満足していたのかもしれない。確かに男子からの虐めは辛かった。それに比べれば、この扱いは周囲を喜ばせ、正しい意味での笑顔を浮かせている。それに彼女が自分を見て笑顔を浮かべるのであれば、自分も嬉しかった。

いつしか、自分と彼女は五歳になり、年長組になっていた。

周囲の女子達はまるで彼女を女王として見ているのか、彼女の言う事は全て従っていた。そして自分の事を彼女の付き人、召使い――

――使い魔として見る様になり、彼女に逆らえばその使い魔

が牙を？くと思っていた。そこまで凶暴になった覚えはない。

しかしその原因は、自分にあるものだった。そう、とある事件が発端で、彼女と自分は周囲からまったく別次元の人間として見られ、完全に周囲の繋がりを遮断されてしまった。

事件、それは自分と彼女が、幼稚園の卒園式を二週間前に控えた日。

自分——僕は、初めて怒りを覚え、牙を剥いた。

始まりの繋がり——幼い少年と少女（後書き）

初めまして。こちらの掲示板で書かせて頂くのは初めてとなります。
新・焰と書いてネオ・エンと申します。

この作品は今まで書いていた作品をアレンジし、力を入れた作品となります。

ダークファンタジーになります。ですが歪んではないと思います。
多くの方に読んで頂き、ご感想、ご意見共々、お待ちしております。

悲惨な事件——守るために、牙を剥く（前書き）

幼馴染の二人。葵に助けられた零夜は、男子ではなく女子達と友達になる。

しかしその関係はさらにエスカレートし、女王と使い魔のようになっていた。

事の発端は、幼稚園の卒園式を二週間に控えた日だった。

悲惨な事件——守るために、牙を剥く

幼稚園の卒園式の二週間前。
事件は起きた。^{それ}

「葵ちゃんが、いなくなっただ？」

夕方の五時。母親の迎えで帰宅した僕が、帰宅した途端に家の電話が鳴り、それに出た母の口から出た言葉だった。

「え……っ？」

母親の足元でそれを聞いた僕は、その場で嘔然とした。
口を開き、母親を見上げる。不安そうな顔をして受話器を握っていた。

「うん。……いいえ、私は見てないわ。幼稚園からさっき帰って来て。うん。……解った。今私も探して見る。いいのよ、困った時はお互い様だよ」

母親は相手を安心させるために提案し、受話器を置いた。

「いい？ 零夜ちゃん^{レイヤ}」

母親が膝を折り、僕と同じ目線で話しかけた。

「葵ちゃんがね、ちよつと家を出たらしくて、今からママが迎えに行くね。大丈夫、すぐに帰って来るからね」

優しく僕の頭を撫でる母親は、その行為と同じく優しく微笑み、しかし次の瞬間には顔を強張らせ、家を出てしまった。

彼女の名は美鈴・葵。

僕の名は孤月・零夜。

性格が正反対だが、それ故関係も上手く行き、今では無二の親友の関係になっている。

恋人ではない。当時の二人にはそんな知識は無かった。

その葵が、いなくなってしまった。

母は迎えに行くと言っていた。違う。そんな容易なことではない。行方不明になっているのだ。

それを思った途端、僕の胸はキュツと締め付けられるようだった。大好きな葵ちゃんが、いなくなった。苦しかった。

――絶対に、そんなの嫌だ！

葵の存在がなくなってしまう。それは僕にとって一番辛いことだった。

楽しい日々をくれたのは葵で、救ってくれたのも葵だ。

ならば、どうすればいい？

僕は必死に記憶を巡らせた。どこかに打開出来る案があるはずだ。そう信じながら。

そしてすぐ見つけた。今朝の事、とある男子が言っていた。

「いいか、今日でアイツをやっつけてやる！俺を虐めた敵、葵だ！」

誰だっけ。顔が思い出せない。

そんな事を周りと話していた、顔を忘れてしまった男子。

これだ。この子が葵ちゃんを……！そう思った途端に、体が動いていた。自室に入り、外出用のリュックサックを引っ張り出す。

その中に懐中電灯、水の入った小さいペットボトル。いざという時の為の防犯ベル、その他諸々の道具を詰める。最後に家の鍵、紙と鉛筆を手取る。

リビングに戻り、覚えてたの字を、鉛筆を握って紙に書いた。

「あおいちゃんをさがします。みつけたらかえります」

幼稚園児としては綺麗な字だ。と思いながら鉛筆を紙の上に置く。鍵を握り、家の扉を開け、施錠した。

あの男子はどこにいるのだろう。それが肝心だったが、道を走る度に記憶を呼び起こした。そう、その男子とは嘗て零夜を虐めていた張本人。その後葵の指示で制裁を受けた男子だった。それなら動機は十分ある。

次に肝心なのは場所だ。実はそれも思い出した。その男子は集団で動き、近所の公園によく集まり、遊んでいた。虐められていた頃、数回そこに連れられ、やはり虐められた。

その公園はあまり人が寄らない。遊具が少ない代わりに木々が生い茂り、段ボールなどを持ち行って隠れ家などを作るのだ。

必ずそこにいるに違いない。零夜はそう思うと、走る速度を速めた。

「何か言う事ないのかよ」

男子の声がする。葵は今、動けない状態にあった。両手をそこらに転がっていたロープで縛られ、公園の奥の、男子達が作った隠れ家にいるのだ。

男子の数は五人。対してこちらは一人。加えて体中に痛みがあつた。ここに来る前に少しの暴行を加えられたのだ。五人相手に、しかも相手は太い木の棒を持っていた。武器を持つ相手と喧嘩をするのは初めてではないが、五人一斉では対応できない。さらに葵は女子なのだ。男子とは力が違う。

一人二人なら対応出来る。しかし五人では次第に反応が遅れ、一撃二撃と攻撃を加えられた。

今の男子、幼稚園児は恐ろしいもので、力の加減を知らない。否、どのくらいの力で人間が壊れるか知らないのだ。幸い壊すまでには力は強くないものの、防御力もない葵は追い詰められ、抵抗を失つた。

そして連れて来られたのはこの場所で、人気もない上、周りに民家が無い。ただ広いだけの空き地なのだ。葵はそこに救いの手を考えたが、全て失敗に終わるだろうと判断する。真実なのだ。もう身体に力が入らない。傷だらけな上、少し血も出ていた。

——もう、駄目かな。

そんな事を考えていた。

しかし次の瞬間、その考えは却下された。

時刻は午後十八時。空は夕闇に支配されかけた。薄暗い隠れ家に闇が訪れようとした瞬間。

「葵ちゃん？」

小さい声が、隠れ家に発せられた。

この場にいる虐めっ子の男子、そして葵が知る声。葵は痛む体を押して僅かに首を曲げ、視線をそこに向けた。

「零^{レイ}ちゃ・・・ん？」

零夜が、そこにいた。啞然としてそこに立っていた。
男子達は誰かと不安な表情を浮かべ、その正体を理解した途端にほくそ笑んだ。

「誰かと思えば、弱虫零夜だよ」

と次々と笑みを浮かべ、各々に棒を持った。葵を追い詰めた棒だ。
葵は零夜がなぜここにいいのか聞きたかった。しかしそれよりも先に、男子の行動から見て予想出来る未来を知り、悲鳴のような声を出した。

「逃げて・・・零ちゃん！」

葵の悲鳴を聞いた瞬間、ビクンと零夜の肩が揺れた。
しかし時すでに遅し。男子達は零夜を囲んでいた。葵は絶望を覚えた。

「あ・・・アンタ達、私を狙いなさいよ！そんな、零ちゃんを狙っても、仕方がないでしょう！」

「うるせえな。安心しろよ。この弱虫やつつけた後で、お前もちやんとやつつけてやるよ。敵め」

葵はそれを聞いて涙した。自分の無力さ。そして零夜がこれからどうなるか、知っているためだ。

「逃げて・・・」

やっと口に出た言葉は、零夜を案じる言葉だ。
そして男子の一人、リーダーが棒を振り上げ、思い切り零夜の頭部

を殴り付けた。その場に崩れるように倒れ込む零夜を見て、葵は言葉に出来ない悲鳴を上げた。

それから零夜は数回殴られた。頭部から出血し、段ボールを汚す。葵はガチガチと奥歯を鳴らし、その光景を眦が裂ける程開いた双眸で見っていた。男子達は葵の姿を見て喜んだのか、再び零夜に暴行を加えた。

「やめてよ・・・」

一方的に暴行を受けても、零夜は悲鳴を上げなかった。それどころか、今や悲痛に顔を歪める葵だけを直視し、なぜこうなったのだろう。と考えていた。

しかしその思考は一瞬で弾け飛んだ。男子の一人が零夜の鼻を蹴り上げたのだ。鼻と共に口と顎を捕え、弧を描いて零夜は反対側に倒れる。また葵の悲鳴が聞こえた。鼻からは鼻血が爛れ、口は口内を切った箇所と唇が裂けた場所から出血し、それが唾液と混じって滴り落ちる。

だがしかし、その衝撃で答えが弾き出された。

この男子共が、葵を泣かせた・・・。

許さない。絶対に許さない。

葵を泣かせた奴だけは、絶対に許さない・・・！

男子達の一方的な暴行が一時中断された。男子達は嬉々として棒で零夜を叩き続け、血祭りに上げた。もう動かない零夜を見て、飽きたのだろう。次の葵と遊ぶつもりだ。

葵は涙でグシャグシャにした顔面を下に向け、俯いていた。守らなくてはならない零夜を守れず、最早真赤に染まった零夜を見て絶望しているのだ。

「さて、どうしようか」

男子達の無邪気な笑顔が向けられる。ぐったりしてる葵を見下ろし、その調理法を考えているのだ。靴で葵の顔側面を踏みつけた。その瞬間だった。

「葵ちゃんに・・・触るな」

生気のない声音が、ひっそりと男子達の後ろにかけられた。

冷たい舌に背を舐められたかのように男子達の肩がビクンと揺れ、顔が恐怖に彩られる。その場で直立し、背中越してその気配を感じた。

獣だ。獣が後ろにいる。少しでも動けば、その爪に引き裂かれ、その牙に噛み砕かれる。物凄い緊張感とプレッシャーが男子達を押し潰そうとしていた。

「零ちゃん・・・？」

泣き叫び過ぎたのか、葵の声は掠れている。絶望に塗れた顔を上げ、涙で覆われている目を数回瞬きし、ゆっくりとそれを見た。

零夜が立っている。いや、それは本当に零夜なのだろうか。いつも

の優しく、大人しい印象を持つ男の子とは懸け離れている雰囲気
身に纏い、そこに立っていた。ユラユラと動き、動く度に体中から
血が流れた。

次に男子達を見た。この五人は今までとは違う零夜の存在を後ろに
感じ、真の恐怖を味わっている。ガチガチと奥歯を噛み鳴らし、ガ
クガクと膝が笑っている。

「零・・・ちゃん？」

力無い声が、再び発される。その声が聞こえたのか、零夜は一度葵
を一瞥した。葵にはその一瞬の視線が、優しく微笑を浮かべたよう
に見えた。

許さない。

葵を傷付ける奴。泣かせる奴は、絶対許さない。

葵を守らなくちゃ。僕が守らなくちゃならないんだ。

そのために――

僕は、牙を剥こう。

悲惨な事件——守るために、牙を剥く（後書き）

葵を守るために、立ち上がった。

それはいけないことなのか？いや、違う。僕は間違っていない。

あの頃は楽しかった。二人で遊んだ、あの日々は……。

幸せな時——築かれる絆（前書き）

牙を剥いた零夜。

その理由は何より幸せだった時間があったからこそだ。

幸せな時——築かれる絆

葵が家に遊びに来た。幼稚園年中組の五月の時。

零夜には姉がいた。九つ上の現在十一歳、小学五年生になる美由紀^{ミユキ}。妹もいた。二つ下の現在二歳になる亜美^{アミ}だ。姉は十一歳にして、秀麗な美貌を誇る容姿をしていて、気に掛けない同級生、上級生、下級生はいないと噂されていた。すでに学校中の生徒から告白され、それを即ふっているという記録もある。

そんな美由紀は好きなもの。弟の零夜、妹の亜美。そして葵だ。零夜と亜美は美由紀ほどではないが、美貌がある。葵はそのサバサバとした性格と年中組のリーダー格という地位についており、美由紀にはとても気に入られていた。

「こんにちは、お姉ちゃん」

家の裏にある庭に、葵の声がする。庭には春だということもあり、蝶が飛び交っている。それを必死に追いまわす亜美。その後ろで転ばないように支えてやっているのは美由紀だ。

「ああ、よく来たね。葵」

秀麗な美貌が葵に向けられ、亜美に集中していた優しい微笑みがそのまま葵を見た。その瞬間にボンと葵の顔が真っ赤になる。美由紀の笑顔は男女関係なく心を鷲掴みにしてしまうのだ。

だがその微笑みが効かない人物こそ零夜だ。零夜だけが美由紀の性格を知っているからだ。

「零ちゃん、こんにちは」

葵の微笑みが零夜を向く。零夜もまた同じ微笑みで返した。

「こんにちは。葵ちゃん」

やはりその微笑みは美由紀に似ている。姉弟だからか。

零夜は家のベランダで絵本を黙々と読み続け、葵が来た時に中断した。しおりを挟み、本を閉じた。

「今日は何をして遊ぶの？」

笑顔で大人しい零夜が葵に歩み寄る。美由紀は転びそうになった亜美を支え、抱えてベランダに収容した。

「そうだねえ・・・それじゃ、こうしようか！」

葵がパツと零夜の右腕を両腕で掴んだ。一瞬何が起こったか理解出来なかった零夜と、おっと笑みを浮かべた美由紀。次の瞬間には零夜が地面に倒れていた。

「な、何が起こったの？」

零夜はまだ何が起こったのか理解出来ていない。葵は零夜を投げ飛ばした。背負い投げだった。零夜は受け身も取れず無様に地面に倒れる羽目になった。

「おいおい、レイ。受け身すら取れないのか？」

腹を押さえてクククと低く笑う美由紀と、未だに笑顔を崩さない葵。その二人に挟まれ、「ひっ」と零夜は悲鳴を上げた。

「男の子が、だらしないぞ」

「そうだよ零ちゃん。男の子らしく、シャキツとしてよ」

二人は零夜の両腕を掴んで無理矢理立ち上がらせた。

「シャキツとしてって言われてもぉ・・・」

泣きそうな顔で姉と幼馴染を交互に見、何とか逃げようと退路を確認する。

「い、嫌だよ！痛い、嫌だ！」

半べそになりながら二人から転がり逃げる。

「にーがーさーなーいー！」

「男の子なら覚悟を決めろ」

逃げ纏う零夜を葵と美由紀が追い回す。

ベランダに上がった零夜の母が、収容された亜美を抱きかかえてその光景を微笑ましく見守っていた。

これがいつもの光景だった。零夜は葵に鍛えられ、さらに美由紀に鍛えられる。

女の子に似た顔が、涙でグシャグシャになる頃には時が流れ、夕刻を過ぎようとする。そこで零夜は解放されるのだ。

葵が帰り、涙で目の下を赤く腫らした零夜に母が聞いた事がある。

「そんなに泥だらけになって。泣いちゃって・・・葵ちゃん、嫌いにならないの？」

それは愚問だった。即座に零夜は顔を横に振り、否定する。

「葵ちゃんね、僕を投げ飛ばすけど・・・いつも楽しいよ!」

満面の笑顔で言うのだ。母も安心したのか、「そう」と言ってタオ
ルで零夜の顔を拭いてやった。

姉の美由紀は密かに、M^マかと嘲笑していた。

場所は代わり、幼稚園の年中組の教室。

葵を中心とした女子グループの中。そこに零夜は座っていた。取り
囲むのは全員女子である。各自多色のリボンや髪飾りを手に持ち、
零夜という人形で遊んでいるのだ。

慣れない手付きでグダグダに結ばれたりボン。中途半端に付けられ
た髪飾りなどを付けられ、口を揃えて「可愛いー!」と黄色い悲鳴
を上げる女子に、にへら、と笑みを浮かべる零夜。

そしてそのまま零夜は葵に献上されるのだ。女子に両手を引つ張ら
れ、葵の前に差し出される。

すると葵は鋭い目つきで零夜を舐めるように全身を見渡し、フンと
鼻を鳴らす。

「駄目。やり直し」

途端に零夜は「ええっ!？」と顔を顰め、女子は「やったー!」と
全員で、再び零夜を囲う。そしてまた装飾を始めるのだ。

これもまた一種の虐めかと思った先生もいるだろうが、男子からの
執拗な嫌がらせよりも、笑顔がある女子の人形ごっこの方がいいと

判断したのか、たまに先生がその輪に入り、零夜を装飾した。それも監督の一種だ。

表情では嫌な顔をしている零夜も、実は自らが人形になりごっこを成す遊びの方が嬉しかった。今まで男子は変な笑い方しなかった。しかし今は本当の意味で明るい笑顔が自分を囲んでいる。何より大好きな葵と一緒にいられる事が嬉しかった。自分を見る目は鋭いが、時々笑顔になり、それが嬉しかった。

幸せな時——築かれる絆（後書き）

築かれた信頼。その数々の絆が崩壊していく・・・。
駄目。そんなのは駄目だよ・・・。
お願い。零ちゃん。それ以上は——！

絶対な拒絶

泣かせる奴を許すな（前書き）

平和から築かれた絆。その関係により、葵が泣いたことに憤怒する。葵を泣かせた奴は許さない。絶対に。零夜が本気で憤怒した瞬間だった。

絶対な拒絶——泣かせる奴を許すな

ゆらりと影が立ち上がる。

暗闇の中。血で汚された段ボール。まるで血の海から伸び出て来た怪物の如く。音もなく、しかし気配はあった。

「葵ちゃんを、放してよ。——もういいでしょ？止めてあげて」

感情の無い声は冷たい。暗闇からひっそりと、静かに放たれた。声を聞いた男子達は全員総毛立ち、震えている。と影が一步、踏み出した。ぐじゅつと血で湿った段ボールが踏まれ、音を立てる。また一步踏み出し、確実に男子と距離を詰めている。

「もう止めようよ、こんなこと・・・」

ついに男子の隣に立った。男子はゆつくりとそれを見た。

紅い、化物だった。

血塗れで零夜が立っている。生気を感じられない瞳はそつと葵に向けられ、またゆつくり歩き出す。

葵の前に立つと傍らに座り、葵を拘束している縄に手を掛け、解き始めた。

「大丈夫？葵ちゃん——ちよつと血が出てる。痛そう・・・痛そうって・・・零ちゃんの方が痛そうだよお・・・」

涙で濡れた頬を、再び涙で濡らした。

「でもすぐに解くから。待ってて――」

そこで零夜の言葉が途切れた。葵の悲鳴が響く。

鈍い音がした。四人の男子が啞然とし、残りの一人の男子――

――零夜を虐めていた男子――が木の棒を振り上げ、思い切り零夜の後頭部を強打したのだ。ゴプツと皮膚が裂け、鮮血が溢れる。

「零ちゃん・・・零ちゃん、零ちゃん！」

拘束され、さらに暴行を受けて動かない体を揺れ動かし、叫ぶ。

零夜は見るからに重傷を負っていた。相手は幼稚園児でそれ程力もない。しかし零夜も幼稚園児で、体が弱い上に防御力もない。さらに太い木の棒は硬い。急所を強打されれば重傷を負う。

それでも、零夜はそこに座っていた。先程のように倒れもしない。ただそこにいるだけなのだ。

「――つて、言ったのに」

すると、小さい声で零夜が呟いた。途端、しんと辺りが静まる。

「もう止めようって、言ったのに！」

叫ぶ。同時に立ち上がった。頭部の傷などないような動作だった。勢いよく振り向く。その双眸は怜悯なまでに鋭く、憤怒を露わしていた。

――葵を傷付ける奴は許さない。

「もう、許さないよ」

――牙を剥け。

「葵ちゃんを泣かせる奴は――」

――葵に敵する者全てに、牙を剥け！

「――絶対に許さない！」

轟と咆哮を上げた。

それから葵の目の前で信じがたい事が起きた。
今まで弱虫だのと罵倒されて来た零夜が、初めて人を殴ったのだ。
その犠牲は最後に零夜を殴った男子で、棒をあつという間に取られたと思うと、零夜の拳が迫っていた。次の瞬間にはその男子の視点は闇空に向いていた。鼻と後頭部に鈍い痛みがある。殴り倒されたのだと気付いた。

だがもう遅い。零夜はその男子に馬乗りになると、次は両手で殴り始めた。滅多打ちだ。抵抗出来ないまま、顔面を何回も殴られる。すぐにその男子は顔を真っ赤に腫らした。

すると周りの男子が悲鳴を上げた。それを反応した零夜が、獣のように早く動いた。次々と背負い投げにすると、同じように殴る。

三分も掛からなかった。五人の男子は全滅した。
すると木の向こうで声がした。大人の声だ。近所の母親が総出で葵

を探しに出たのだ。

酷い光景だった。

まず最初に聞こえたのは男子達の悲鳴。何だろうと母親達が公園に足を踏み入れる。そして次に聞こえたのは防犯ベルの音だった。けたたましい騒音が響き、確信と不安を抱いた母親達が公園の深部に入り、段ボールの隠れ家を見つけ、中を覗いた。

地獄絵図だった。段ボールの中は血塗れで、そこに転がっている男子五人。さらに奥に声が聞こえた。

女の子の声が、しゃっくりと共に聞こえた。葵だった。

「葵ちゃん！大丈夫！？」

母親の一人が段ボールの中に入る。葵の母だ。それを境に次々と母親が入り、中には携帯電話を手に取り、見つけたという連絡をしている親がいた。

中に入った母親全員が息を呑んだ。まず五人の男子。顔を真っ赤に腫らし、倒れている。息はあった。しかし問題は奥の葵の方だ。持ち出された懐中電灯に照らされたその姿は、胸を中心に紅く染まっていた。その原因を胸に抱いている。

「た・・・すけ・・・れ・・・いちゃ・・・死んじゃ・・・う」

カタカタと震える小さな体に零夜が抱かれ、その零夜こそ真赤に染まっていた。それが血だと解った途端、携帯電話を持つ母親に、

「救急車！早く救急車を呼んでっ！」

と叫んでいた。その母親も零夜を見て青い顔になり、一瞬で我に帰るとすぐに連絡を繋げた。

葵はただ零夜を抱いて泣きじゃくる。

五分後に零夜の母とその姉の美由紀も到着し、現場を見て啞然とした。

絶対な拒絶

泣かせる奴を許すな（後書き）

憤怒の後は静寂がある。地獄絵図と化した現場。消えかけている命。これはまだ始まりにすぎなかった。

鮮烈な別れ——自暴自棄（前書き）

地獄絵図から一週間が経過した。それによつて零夜にある感情が生まれた。それは全ての始まり。ここで終わり、ここから始まったのだ。

事件から一週間後の事だった。

葵はこの一週間は幼稚園に行かず、毎日零夜の入院する病院に通った。零夜は全身打撲に頭をかち割られ、何箇所も、何針も縫った。縫うために全ての髪の毛を刈り取る羽目になり、ニットを被っている。

そして零夜が殴り倒した男子達は全員病院で処置を受けた。顔が痣だらけになっただけで大したことはない。しかしその夜の夜に全員が親に酷く叱られた。女子に暴行を加え、男子を重傷に追い込んだ。当然の結果だ。

当の零夜はといえば、何と一週間で退院した。医師にしてみれば理由は不明だが、考えられることは零夜の自然治癒力が通常の園児よりも数倍高いのだと言う。

一週間で退院した零夜は幼稚園に向かい、それに葵が付き添った。二人とも包帯を巻き、絆創膏を体中に張っていた。

二人で手を繋ぎ、門を通る。

「いい、零ちゃん^{レイ}」

話しかけた葵は零夜を見た。しかし零夜は葵を見ようとはしない。

「これから、戦いが始まるんだよ」

葵は構わず続けた。そして歩く。零夜も無言で付いて来る。

「でもこれからは私達二人で、戦って行こうね」

——違う。

「大丈夫。この前の戦いで、零ちゃんが強いって事。解ったから」

—— 違うよ。

「勿論私も戦うよ。．．けど、頼りにしてる」

—— お願いだから、気付いて。

「もう二人だけしかないんだ。もう私達、仲間だよな」

—— 僕は．．

「絶対二人で、やって行こうね」

—— もう、違う人なんだよ．．．！

二人の歩みが、止まった。突然零夜が立ち止まった。繋いだ手が離れ、葵が怪訝そうに振り向いた。

「零ちゃん？」

朝、誰もいない廊下に葵の声が響く。二人で歩いたところは埃が舞い、それが朝日の光を受けてまるでダイヤモンドダストのように輝いた。

そんな神秘的な空間に、緊張感が張り詰めた。暫くの沈黙の末、やと零夜が口を開いた。

「僕は．．．僕が、嫌いだ」

「え？」

「もう僕は——人じゃないよ」

「何を、言ってるの？」

「あんなに人を叩きたいなんて思ったこと、初めてだった。あんな怒ったのも、初めてだった」

眉間に皺を寄せ、苦しそうに零夜は叫んだ。

「葵ちゃんを泣かせたのはあの子達だけど

——僕でもあるんだっ！」

心の叫びだった。葵に向けて、何より自分に向けて。

「僕はもう、自分を信じられない。……ごめんね」

それだけ言うと、零夜は一人で教室へ向かった。

「……零ちゃん？」

唖然とし、何が起こったのか理解出来ない葵は、その場に直立してポツリと呟いた。

それから零夜は葵とあまり話さないまま、卒園式を迎えた。

虚無の一週間。葵は何度も美由紀の胸で泣いた。吹っ切れないまま二人は小学生となる。

しかし、零夜は違った。孤月家は都会に引っ越す事が決まっており、

零夜が幼稚園卒園した日に引越すのだ。

見送りに近所の人々が集まった。当然葵もいる。美由紀は思い切り葵を抱擁する。しかし零夜は一回だけ笑っただけだった。その笑いも寂しく見える。

もう会う事もないだろう。零夜と葵は幼馴染で関係を終わらせたまま、引き離された。

桜が咲き始めた日の事だった。

鮮烈な別れ——自暴自棄（後書き）

零夜は自暴自棄の末、都会に引つ越した。

しかしそれは終わりではない。始まりなのだ。時は流れ、九年が過ぎる。

桜が咲き誇る最中、二人は同じ場所で再会する。それは最早、運命なのか……。

無表情な少年——感涙した少女（前書き）

あれから九年。葵は高校に入学しようとしていた。春の季節に訪れる僅かな希望を胸に抱き、今日も日課である彼の家へと足を運ぶ。しかし彼の家で葵を待っていたものとは……

無表情な少年——感涙した少女

桜が舞う季節。四月のことだった。

群馬県桐生市。そんな田舎町にも桜はある。その内の並木道を歩いて通った。これは嘗ての幼馴染の家へ通じる道であり、暇であったり、予定が無い時はここを歩いてきた。季節は関係ない。

嘗ての幼馴染とは幼稚園の卒園式で別れた。それっきり会っていない。幼馴染は都会、東京へ行ってしまった。名を孤月・零夜。

そして並木道を歩くのは、美鈴・葵。この春で高校生になる。当然零夜も高校生になる。

なぜ葵は並木道を歩くのか。それはやはり零夜を心のどこかで思っているからだろう。葵はあれから小学生になり、友達も沢山出来た。事件以来、性格を改めたのだ。女王のような猿山の大将気取りを辞めて、誰にでも笑顔で受け答え出来るような、当時の葵とは見当の付かない爽やかな少女へと変化していた。

性格だけではない。その容貌も整っていた。ランクで言えば中の上。中々の美貌でスタイルもいい。それ故か中学生時代は何通かラブレターをもらった。しかし即座に断っていた。

顔では笑っているが、心では誰も許していなかった。勿論それは自分も入っており、特に自分には厳しかった。

あの頃のように形だけで守りたくない。そう思った葵は本格的に格闘技を習い始めたのだ。元々葵は武術の才能があった。昔はよく零夜を実験台にしていた甲斐もあり、習い始めて間もなくその才能は開花した。高校に入るまでには殆どの格闘技を習っており、有段者でもある。高校の部活に入る時は、空手にしようと決めていた。もう既にそこの男子とは比べ物にならない位の力量を身につけ、周囲から畏怖と尊敬の意を表されている。

そんな葵は毎年、特に春の桜が舞う季節。入学式に近い時にあの事

を思い出す。零夜との楽しかった日々を。幸せだった生活の日々。一緒に遊んだ日々。それらを思うと涙が浮かんた。しかし今は出ない。慣れてしまった。振り切ったという訳でもない。ただ単純に慣れてしまったただけなのだ。

が、今年は何か違う気がした。

予感と言うべきか。新たな学校に通学し、新たな友人を作る。どんな日々が待っているのかと期待に胸躍らせる。

しかし今年は段違いなのだ。何か不安が混じり、大きな希望がある。その答えを探すべく。零夜の家に向かうのだ。何もない家。鍵が施錠され、寂しくなっているあの家へ。

無言で並木道を歩く。そして交差点を右に曲がれば、そこに彼の家が見え――

「え？」

その光景に、思わず声が出た。

彼の家の前に二台の運搬トラックが停まっていたのだ。引越越し屋のトラックで、もう荷が降ろされ、家具が家に収容された後だった。しかし目を見張る点はどこではない。トラックの運転手二人と、それに対峙している一人の少年。見覚えがあった。その少年は一人で運転手に対応し、一礼した。運転手も一礼すると、すぐにトラックに乗り込んでその場を去った。少年はそのトラックを眺め、角で曲がって消える所でやっと視線を戻した。

首を元に戻す。つまり少年の横顔が見える位置。少年は溜息一つと、ゆっくりと振り向いて家を見上げた。家は大きかった。三階建ての一軒家で、一階は車庫、二階にリビング。三階に部屋。屋上もある。周りから見れば群を抜いて高く広い家だ。孤月家の、零夜の祖父の代からそこに住まった家だと言う。

葵はずっとその少年を眺めた。見覚えがあるのは迷信ではない。確

かにその面影はある。

と、少年は葵の視線に気付き、そちらを見た。

「あ・・・」

葵が口に手を添え、やっと気付いた。はっきりと見えた顔は確かに

・・・

「零^{レイ}、ちゃん？」

孤月・零夜その本人だ。零夜は少女が葵だと気付くと一瞬目を大きく開き、しかしすぐに細めてしまった。それでも葵は構わない。震える脚を、ゆっくりと前に出した。緊張で心臓が体内から出そうな痛みを堪え、何とか前に出る。一方零夜に変化はない。葵を見つめたまま、そこに立っていた。

「零ちゃん、なんでしょ？」

やっと零夜の目の前に立つ。九年ぶりの再会で葵の目には涙が浮かんでいる。しかし零夜に変化はなかった。無表情で葵を見ている。その身長は葵と大差ない。僅かに零夜が高いだけだった。整った目鼻立ちと少し長めの黒髪。少女に似た容貌は秀丽で、とても少年とは思えなかった。ただ目付きが変化していた。切れ長の双眸、濁った瞳。その目付きが無表情と合わせれば、それはもう伶俐で陰険な雰囲気醸し出すしかなかった。そんな零夜も、やっと口を開いた。

「——ああ、美鈴か」

心のどこかに亀裂が走った気がした。零夜の声こそ低くなっている。

少年らしい声だ。しかし言葉は違う。冷たく突き放すような口調に、曇った物言い。今もボソツと呟くように放たれたのだ。

「そう言えば家が近かったな。――九年ぶりか」

口の端を僅かに釣り上げているのだが、それがまったく笑みに見えない。悲しく寂しい表情だ。

「そうだね。元気だった？」

葵は嬉しいのか悲しいのか解らない表情で言う。

「元氣を出せるほど東京は狭くない。毎日疲れるだけだ」

ククと低く笑う零夜はまるで自嘲に見えた。

「あ、あのね・・・私、零ちゃんに言いたい事が・・・」
「静かにっ」

葵の発言を零夜の叱責に似た鋭い声が制止した。ビクツと肩を揺らし、葵は跳び上がる勢いで口を閉ざした。

零夜は雰囲気を一変させ、鋭く辺りを見回した。研ぎ澄まされた表情で周囲を睨むその姿は、昔では想像出来ない程の剣幕を表し、葵を驚かせた。

「零、ちゃん？」

「気のせいかな」

ボソツと呟き、また無表情に戻る。葵を見た。

「どうしたの？」

葵が不安そうに尋ねた。

「何でもないよ」

冷たく答えた。葵は俯き、黙ってしまった。しかし数秒後には新しい話題を見つけた。

「そう言えば、美由紀お姉ちゃんや亜美ちゃんはどうしたの？」

「あ・・・いや・・・」

今度は零夜が俯く番だった。何か迷っている表情で目を細め、地面を見ていた。顔を上げた時に答えを出した。

「一人暮らしをしようと思ったんだ。それでこの家を使う事になった。——美鈴はもう高校生だろう。何高だ？」

「え・・・南高だよ」

「そうか。同じだ。俺も南高だ」

もう一つ葵は驚いた。一人称が変わっていた。男らしい俺を使い、昔のような可愛らしさを消していた。

「そつか。一人暮らしなんだ。——ねえ、また昔みたいに遊びに行っていていい？」

「それは——まあ、都合がよければいいけど」

「良かった・・・ねえ、零ちゃん」

「何だ」

葵は俯いて指を絡ませていた。零夜が見ている最中、さなか恥ずかしそう

に言った。

「少し、歩かない？」

やっと言えた言葉。話したい気持ちを精一杯込めた。
が、

「駄目だ」

返って来た言葉は拒絶の言葉。葵の期待が一瞬にして玉砕した。

「まだ、家の掃除を終えていない。――終わってから
な」

「なら、手伝おうか？」

「一階から三階まで隅々やるんだがな。出来るのか？」
「うっ――」

顔を顰めた葵に、零夜は溜息を吐く。家の鍵をポケットに仕舞うと、

「南高の入学式はもう近い。その日にまた会おう」

そう提案した。葵は少し寂しそうな顔をして零夜を見る。

「でも・・・」

「どちらにしろ、今日は無理だ」

拒絶を繰り返す零夜に、葵は項垂れてしまった。折角の再会を喜び
たかったが、零夜がそこまで言うなら仕方がない。

「解ったよ。――また、今度ね」

「ああ。それじゃ」

葵は帰路を歩く。その姿を零夜は見守っていて、葵は何度も振り返って手を振った。零夜の反応こそ無い物の、ずっと見ていた。曲がり角を曲がり、姿が消えるまで。

ずっと。

無表情な少年——感涙した少女（後書き）

再会を果たした葵と零夜。しかし零夜は無表情で冷たい。やはりまだ葵と自分を許していないのか。数日後、二人は南高に入学し、新しい生活を始める。そこに待っていた人物とは——
！

不安な入学式——一瞬だけ咲いた花（前書き）

葵と零夜が再会してから数日後。南高で入学式が行われる。葵は母と出席する。しかし零夜は一人だった。そこで葵の母が提案し、零夜の何かが揺れ動いた。

不安な入学式——一瞬だけ咲いた花

桜が満開で咲き誇り、花弁を散らす。散り落ちたそれによって校庭は薄い紅で満たされ、春特有の特別な絨毯へと化した。またその絨毯を歩くのはそれに相応しい者達。新しい征服に身を包んだ新一年生。

ここは南高と呼ばれる高校で、今日は入学式だ。完全征服制で、共学。清潔感ある白い校舎に淡い紅の桜がよく似合う。清潔であることに女子には大変人気があり、男女の人数差はあまりなかった。

そんな高校に今日から通う事になる一人、美鈴・葵は母親と共に一人の男子を探していた。入学式だけあって父兄が新一年生に同伴することも多く、今でも珍しいことではない。しかし逆に両親のどちらでもない生徒はいた。仕事の都合上、仕方なく子供の晴れ姿を見られない親もいた。

が、彼は違った。孤月・零夜。零夜は数日前東京から戻り、元住んでいた彼の家に住み始めたのだ。両親もいなければ姉の美由紀も妹の亜美もない。一人暮らしなのだ。一度だけ葵は母と共に零夜の家へ挨拶に行った。が、零夜は葵の母がいても無表情だった。昔は明るい笑みを浮かべ、駆け寄って来たというのに、九年の時を経て零夜は変わってしまった。人は時が過ぎれば変わるものと言われるが、最早ここまで変わるのだろうか。と疑問に思う。昔は優しい笑みを浮かべて「葵ちゃん」と言って来たものだが、今では「美鈴」と無表情で、しかも名前ではなく名字を呼んだ。冷たかったし、何より悲しかった。

と、そんなことを思っている時、母が叫んだ。

「あ、零夜くん！」

相変わらずテンションが高い葵の母は、満面の笑顔を浮かべて大き

く腕を振った。葵はいきなりの行動に母に羞恥を覚え、「や、止めてよ！皆が見てる！」と叫んでしまった。その通り、周りを歩いていた同級生とその父兄が葵と葵の母を見て、クスクスと笑みを浮かべていた。葵は顔を真っ赤にして、「もう！」と母をにそっぽを向けた。

しかしその甲斐あつて彼がこちらに気付いた。葵の母はそっぽを向く我が娘など気にせず、零夜の名を呼んで腕を振り続けた。

零夜の変わらない所は少ない。少ない内の一つを上げるとすれば、美貌だろう。整った目鼻立ちに艶のいいショート黒髪。華奢な肢体に細められた双眸。まるで少女が男装しているかと思わせる、美少年だ。さらに美貌を際立たせるのは、零夜の傍には誰もいないことだ。両親もいない。一人でいることで周りと比較が出来ず、余計に美しく見えた。それ故に周りで歩いている女子からは黄色い悲鳴が絶えなかった。

やがて零夜が歩み寄つて来た時に、やっと母は叫ぶのを止めた。

「来たねえ。零夜くん」

「あ、はい」

短く答え、零夜は葵の母に一礼する。次に葵を見て、何をしているのかと考えた後、

「具合でも悪いのか？」

と尋ねていた。葵はまだ顔を少し赤くしていたが、即座に短く答えた。

「別に！」

ツンとした態度で零夜に答える。少し怒ったかなと一瞬だけ零夜を

一瞥したが、何と零夜はもう葵から視線を反らし、葵の母に戻っていた。

「零夜くん、一人暮らしだよね」

「はい」

「じゃ、仕方ないから私が朱音さんの代理やっただけね！今日だけ私をお母さんだと思いなさい！」

「え・・・？」

その時。葵には一瞬零夜の表情が歪んだ様に見えた。どこか悲しそうに、しかし嬉しそうに。だがそれも一瞬だけで、すぐに元の無表情に戻った。
が、声は震えていた。

「有難う、御座います」

深く頭を下げた。それには葵も葵の母も驚き、親子共々顔を見合わせる、微笑を浮かべた。

「いいのよ、零夜くん。子供が一人増えたただだし。まとめて録画してあげるから」

母は鞆からビデオを取り出し、誇らしく両手に掲げて見せた。
それを見た零夜に、驚くべき事態が起きた。

「はい」

と短く答えただけではない。一瞬、明るくはにかんだ。まるで花が咲くかの如く、そこだけ明るく彩った。
それだけだ。たった一秒その表情を見せた途端、葵と葵の母だけで

はない。周りにいる男女全員を巻き込んで衝撃を与えた。全員がボツと顔を赤らめ、湯気立たせる。表示が出るならば『一撃必殺』の文字が出るだろう。

零夜の笑顔は全員の心を打ち抜いた。

と、零夜は腕の腕時計に気付き、時刻を見た。

「もう新一年生は集合の時間か。美鈴、行くぞ」

花が咲いたのは一瞬だけだった。零夜はすぐに無表情に戻ると、葵を促して先を歩いた。

「あ、待ってよ」

「早くしろよ。――では、また後で」

葵の母に一礼すると、零夜は生徒用玄関を目指して葵と共に歩んだ。クラス分けの紙を教師が配っている。それを受け取り、そこに書かれていた番号に革靴を入れ、上履きに履き替える。二人はすぐに玄関から中に入り、姿を消してしまった。

その場に残った葵の母が、「零夜くんだけ撮ろうかしら」と呟いたのは、二人は知らない。さらにそれを思ったのは葵の母だけではない。零夜の笑顔で射ち落とされた女子生徒が密かに母に頼んで零夜の姿をビデオに撮ってもらったのは、少なくともなかった。

入学式は以外と呆気なく終わった。式典中、女子全員の視線がちらちらと零夜を向いていたことが、なぜか無性に気になったが、零夜は全てそれらを黙殺していた。

しかし今年の一年生男子は中々レベルが高いと噂されているらしく、零夜の他にも視線を集める男子もいた。その男子は自身を見る女子に式典中であることにも関わらず、必ずその視線に気付き、そちらを見て笑顔を浮かべると手を振っていた。何度教頭に睨まれたことだろう。

学校関係の先生が話を終えると、学校生活について色々な説明があり、それが終わると式は終わりとなった。

新一年生は生徒用玄関で配られたクラス分けの紙にある自分の名前、その組みに従い各教室に向かうのだ。三組まであり、葵は二組で零夜も同じだった。

奇遇なことに二組を担当することになった担任も、葵と同じ時期に赴任した若手教師で、女子からの人気も高かった。

「僕は水畑・祐樹みずはた ゆうきです。皆さんと一緒にこの学校に来たので、皆さんと一緒にこの学校について学びたいと思います！どうぞ宜しくお願いします！」

教室の机に生徒が座り、父兄が教室の後ろに立つ。教卓に立つの新任教師の水畑・祐樹だ。明るい笑顔と優しい態度で生徒と父兄関係なく好印象を与え、教師であることに慣れていると思わせた。

葵は水畑教師を良い教師と認識し、何となく右から二つ隣、一つ前の席を見た。そこには零夜が座っている。と、零夜の表情が変なことに気付いた。無表情の顔に陰険な雰囲気を持つ零夜が、それに加えて誰も寄せ付けない覇気を放っている。双眸も鷹の様に鋭かった。水畑教師を睨んでいる。何か気に入らないのか。

水畑教師は生徒だけにではなく、父兄にも礼儀正しい挨拶をし、その場を締めくくって解散と指示をした。父兄の中には「いい先生ね」「爽やかで好青年だね」と水畑の話題で持ち切りとなり、我が子が戻って来る時に教室を出た。

零夜は一人だ。親もいない。故に配られたプリントを鞆に入れると

席を立ち、教室を去ろうとした。が、それを阻んだのが葵だった。

「どこ行くの？」

「家。帰る」

「まだ早いよ」

午後十五時を時計は指している。零夜の腕時計もそれを示していた。

「ね？——どこか、喫茶店でも行こうよ」

誘いをかける。周りの女子が葵を恨めしく見ていたが、葵に気にした様子はなかった。

「次合う時は入学式って言ったよね、あの時。じゃ、今日は私に付き合ってよ」

葵は強引に零夜の手を掴むと、母の元に連れて来る。

「ああ、若人は羨ましいわあ。まさに青春を謳歌してるって感じね。二人とも征服似合ってるじゃない。いいわ、夕飯までには帰ってきなさいな」

すでに葵は母に話をつけてあるようで、手を振っていた。結局零夜は近くの喫茶店に行くことになり、零夜がいなくなってから出来たという葵のお勧めを奢らせられる羽目になった。

教室を出る際、零夜は教室の教卓を睨んだ。そこには水畑教師が父兄と話をしている最中で、零夜の視線に気付いた水畑教師はにっこりと微笑み、視線に答えた。

零夜の睨みが鋭くなり、教室から出た。

一瞬の、出来事だった。

不安な入学式——一瞬だけ咲いた花（後書き）

入学式を終えた零夜。しかし、その背に影が覆い被さる。本格的な戦いが、始まるうとした瞬間だった。

妖艶な冷笑——闇夜の密会（前書き）

その日の夜。やっと葵から解放された零夜が向かった場所は屋上だった。何も変わらない景色に零夜は——

妖艶な冷笑——闇夜の密会

「まさか本当に、こんな生活になるとはな。思ってもなかった」

入学式があつた日の夜。零夜は家の屋上に出て夜景を眺めた。九年ぶりの景色はやはり変わった気配はない。変わったとしても建物だけで、土地の空気は変わらない。どれだけ時代がデジタルになり、この田舎町に変化を齎そうとも、家の隣にある広い畑の土の匂い、畑に沿って流れる小川のせせらぎ、虫の声は変わらない。

全て九年前の記憶だが、目の前に広がる景色は全て同じで、雰囲気も変わった気配はなかった。

しかし一つの変化と言えば、やはり自分だろう。全て真逆の性格で冷たい。それは自負していた。鏡で自分の顔を見れば解る。酷い顔をしていた。写真などを見比べても面影はあるものの、目が死んでいた。昔は優しい瞳だった。だが今はまるで鷹の様な鋭く、切れ長な双眸だ。瞳の色が濁り、目の下にもうつすらと影が出来ている。

「あんな別れ方なのに、何で葵は・・・俺を・・・」

屋上の柵を握り、彼女の家を見る。三階建ての零夜の家は一階建ての葵の家を見下ろせるのだ。それ程遠くない距離で、坂を下ったところに葵の家はある。昔はよく遊びに行った。

葵の家の、葵の部屋を見る。昔と変わらない位置にあつた。まだ明りは灯っているものの、カーテンに遮られて中が見えない。当たり前だと思つた。

と、その直後にそのカーテンが開き、葵が顔を出した。窓を開ける。手には何かを握っていた。携帯電話だと気付くと、零夜のズボンのポケットにある携帯電話が鳴った。相手は画面を見ずともすぐに理解出来た。

「——はい」

『零ちゃん。ずっと見るのは良くないよ?』

「お前は超能力者か?——しかし、今俺は奇遇にお前の家を見ただけだ」

『素直じゃないなあ』

葵だ。強制連行させられた喫茶店で無理矢理アドレスを聞かされたのだ。

「今何時だと思ってる。非常識だ」

「それは零ちゃんにも言えたことでしょ。何時まで起きてるつもり?」

今見た画面では深夜二十三時を示していた。

「零ちゃんみたいな都会でこんな時間に電話すれば迷惑になるだろうけど、ここはいなかだもん。迷惑は掛からないよ」

「僕に対して、だ」

「もしかして、迷惑だった?」

「常識で考えろ」

零夜も口調では厳しいが、表情はそうでもなかった。僅かに唇の端が吊り上がっている。口調が変わるうとも零夜は零夜なのだ。葵もそれが見えたのは、窓から手を振っていた。

「それじゃ、もう遅いし。常識的に考えて寝るね」

「ああ。——それじゃ、明日」

「うん。また、明日」

携帯電話の通話を切り、葵の家を見た。葵は笑顔で零夜を見て手を振り、カーテンを閉めた。零夜も手を上げて応えた。

再び屋上に静けさが戻り、春の暖かい風が零夜を優しく撫でた。闇夜が訪れ、月を雲が遮る。一瞬だけ屋上を闇が包んだ。

「本当に、こんな平和を満喫出来るなんてな。東京じゃ考えられなかった」

自嘲に似た苦笑いを浮かべた。パタンと携帯電話を畳んでポケットに入れる。いつしか虫の声も止んでいた。まるでそこだけ時間が切り取られたかのような静寂が零夜を包む。

と、闇を作り出していた雲が去った。再び月が現れ、月明かりが零夜を朦朧と照らした。

零夜が今まで住んでいた東京は、夜でも明るかった。眠らない街、新宿などネオンが街を照らし、歩く人々の賑わいが絶えない。そんな中を零夜は九年間生きて来た。光に目が慣れてしまったのか、田舎町の闇は零夜の目に光を届けてはくれなかった。しかしこの数日でやっとこの暮らしに慣れた。暗闇でも目が利くようになった。

東京は自動的に光を瞳に届けてくれる。しかし光源が少ない田舎町では自分で光を見つけなければならぬのだ。その点では都会者よりも田舎者の方が強い気がした。原始的な強さと言うか、自力で光を見つけられる強さ。真直ぐな生きざまは都会者も見習うべきであると思える。

元々田舎出身の零夜はその強さが備わっている。忘れた感覚をゆっくり思い出し、引き出したのだ。すると、その時だった。

「もう、慣れたか？」

突然のことだった。屋上の隅から声がした。屋上には零夜しかないな

い。家には零夜以外誰もいないはずだ。よってここに第二者の登場は物凄く不審に思える。

しかし零夜はまるでそこにいる事を予想し、解っていたかのような動作で、ゆっくり振り向いたのだ。

「この光源が少ない田舎町は空気がいいな。僕も別荘を建てたい」

第二者は馴れ馴れしく話しかけた。そのまま零夜に歩み寄る。

「別荘を建てるのはお前の勝手だが、ここの近くに建てるなよ」

苦々しく零夜が言う。第二者はアハハと笑いながら月明かりに照らされる。

南高新任教師、水畑・祐樹だ。

「——調べは、ついたのか？」

零夜が呟くように言う。祐樹は頷いて言った。

「ああ。南高にいるって事は確かさ。人物も大分搾り込めた」

祐樹は持っていた鞆から色々と書類を取り出して零夜に手渡した。

零夜は無言でそれを受け取り、素早く捲っている。

「この事件。奴が？」

「ここ最近、この街で事件が起きていることは知ってるな？——」

——通り魔と言うか。ただ通り魔とは深夜などに行われるのがオーソドックスな考え方だよな。が、その通り魔さんは白昼堂々、大衆の目の前で事件を起こしやがる。だが、白昼だというのにも犯

人の目撃証言はなし。これがここ数日で得られた情報だ」

「事件———どれも殺人事件だな。手口は？」

「体全身を切り裂かれてる。バラバラ死体なんてなのもあるな。真昼間だから死体はすぐに見つかるよ。けど、犯人を見た人が今まで誰もいない。———何でだと思う？」

「———コントラクター 契約者が」

「当たり前だ。契約者絡みならお前の出番だ」

祐樹はそれだけ話すと、元いた場所に戻った。

「里帰りで感涙するのはいいが、仕事に支障を出すんじゃないぞ」

言葉に似合わない爽やかな笑顔を浮かべ、屋上の隅に立つ。すると再び雲が月を覆い隠し、闇が訪れた。雲が去り、月明かりが屋上を照らした時。水畑・祐樹の姿はもうそこにはなかった。

「支障だって？ 一体誰に物を言っているんだ」

ボソツと呟きを漏らす。

「俺を誰だと思ってやがるのか———いいだろう。試しているのなら、あえてその試しに乗ろうじゃないか」

クククと低く笑う。手から書類が滑り落ち、屋上の床一面に散らばった。

屋上には静けさと、零夜の冷笑だけが闇夜に刻まれた。

妖艶な冷笑——闇夜の密会（後書き）

零夜と祐樹は知り合いだった。それもただの知り合いではない。仕事仲間なのだ。次回、街を揺るがす事件が零夜に直面する。

悲痛な悲鳴——戦いが始まる（前書き）

入学式の次の日。事件は突如起こる。水畑教師から伝えられた情報通りだ。人々の悲鳴が木霊する。

悲痛な悲鳴――戦いが始まる

「零ちゃん」

家を出て十字路を曲がった。その直後に声がかかる。背後からだった。振り返れば案の定、予想通りの少女が手を振って走って来る。南高の征服であるセーラー服がよく似合う。

「美鈴、か」

それ程驚いていない顔をして、零夜は葵が追い付くのをさり気無く待った。葵はすぐに零夜の隣に追い付く。それ程息を切らせてはいなかった。流石運動系の部活に入っただけのことはある。

「やっぱり、この時間で正解だったね」

と明るい笑顔で言った。が、零夜は反対に、

「誰か待っていたのか？」

静かに呟くように尋ねる。すると葵はすぐ首肯した。

「零ちゃんをね」

「頼んだ覚えはないけどな」

冷たく言い放つと、零夜は一人で歩きだした。すぐに葵も歩き出す。

「どおして？」

「俺達はもう高校生だろう。昔みたいに、昔みたいに――」

「どうしたの？」

言葉を詰まらせた零夜は、俯いた。何か考えている様子だ。葵はそんな零夜を心配そうに覗いた。

「——いい加減に、ちゃん付けは止めてくれないか？」

「学校ではそうするよ。あ、その代わりに、零ちゃんも昔みたいに呼んでよ！」

「は？」

「ほら。葵ちゃん、って。昔は可愛く呼んでくれたでしょ？」

「——先に行く」

零夜は諦めたのか、並んで歩くのを止めて歩く速度を上げた。しかし葵はその距離を簡単に詰める。

「待ってよ。——あ、恥ずかしいんだ？」

面白そうに葵が笑い、零夜の顔を覗く。

「つつ！」

零夜はそれを予想出来なかったのか、驚いた表情で下から現れた葵を見て、顔を上げた。

女子に似たその綺麗な顔が、今や真っ赤に染まって葵を睨む。葵は少し驚いたものの、また面白そうに笑いだした。腹を抱え、零夜の肩を何回も叩く。道行く人は二人の光景を見て奇妙そうに思っていたのだが、やがて二人がそういう関係なのだろうと気付き、何気ない顔で歩いた。

葵の哄笑が止み、零夜の顔がやっと落ち着いて本来の白い色に戻る。そこでやっと葵が言った。

「おはよ、零ちゃん」

「おはよう。美鈴」

当然な遣り繰りだが、葵は少し困った顔をして零夜を見た。

「ヤだなあ」

「何が？」

笑っているのだが、困っていた。それを怪訝に思った零夜が尋ねた。

「本当に、呼んでくれないのぉ？ほら、葵ちゃんって」

「さっきも言ったが、俺達はもう高校生だ。そんな呼び方は嫌だ」

「ならせめて、葵って呼んでよ。美鈴だと——その、余所余所しくて」

「違うのか？」

「え？」

零夜が立ち止まり、葵に聞いた。葵もつい立ち止まる。

「俺達はもうそんな関係じゃないだろう」

「え？」

「その呼び名を昔を覚えていたなら、あの事も覚えているだろうに」

それだけ言つと、今度こそ零夜は先を行つた。葵は動けなかった。

あの事。九年前の事件。卒園式二週間前に起きた事。葵が男子児童に囲まれ暴行を加えられ、零夜がそれらを一蹴した事。

あの件から零夜は自分を否定し、葵から離れた。やはり零夜には傷

があつたのだ。そしてその傷を付けたのはまた葵でもある。あれから九年が経過し、何らかの形で零夜は傷を癒したのだろうと思った。しかしそれは思っていただけの、葵の妄想にしかすぎない。現実は大きく違つた。零夜はまだ傷を塞いでいない。それどころか傷を広げ、苦しんでいる。自分を許せていないのだ。それは勿論、葵も許していない。

やはり自分が原因なのか。そう思った直後。一つの疑問が浮かんだ。

———

づいたのだ。

嫌っているのなら、許せずにいるのなら、なぜ葵と口をきいたのか。それどころか、夜の電話だつてすぐに出た。忌々しく思うなら、無視や苛立ちなどの表情を見せるはずだ。

無表情は決して嫌っている訳ではない。無表情でいても会話は成立していた。昨日だって無理矢理ではあるが喫茶店で談話の末、携帯電話の電話番号とメールアドレスを教えてくれた。

ではなぜ零夜は、あんなに淋しく見えるのだ

……

その日の昼休み。零夜は一人で校庭にいた。持参したパンとペット

ボトルの紅茶を持ち、ベンチで昼食を済ますのだ。

葵は結局零夜を見送り、姿が見えなくなってからやっと歩き出した。遅刻はしなかったものの、あれから零夜と話していない。話せないのだ。それを良い事に昼休みに女子が零夜に群がる。しかし零夜は女子を相手にせずに教室を出た。

そして今にあたる。校庭には花見気分で弁当を広げる女子の先輩がいた。零夜の座ったベンチはそこから近くはないが、会話は聞こえた。

「そう言えばさ、和田先生来てないよねえ」

「え、和田先生？——ああ、二、三年前に来た新任の。確か春休み前の授業の日もいなかったよね。何してるんだろっ」

他愛もない会話を密かに零夜は耳を傾けていた。

「まさか、エンコウだったりして？」

「どっちの？遠距離恋愛？それとも遠くへ行って・・・」

「まさか。あんなビクついた憶病先生に何が出来るのさ」

パンを齧りながら話を聞いた。ただ静かに、周りの情報をかき集めるのだ。

「まさか。今流行ってる殺人犯だったりして？」

ピクリ。零夜の手が止まる。しかしすぐに動いた。

「確かに、この前なんて週四のペースで休んでたけどそれはないでしょ」

「だよな」

ここで女子達の噂が途切れ、違う話題に変わる。

もういいかな。と零夜は食べ終えたパンのビニールを握りつぶし、紅茶の入っていたペットボトルをゴミ箱に投げ入れた。

と、その時だった。

「あれ。和田先生じゃない？」

背後にいる女子が正門を指差した。零夜もさり気無くその方向を一瞥した。正門を潜ったのは男性で、白いスーツを着た清潔感ある教師だ。

和田教師は手を振る女子に微笑し、手を振ってそれに答えた。その他の生徒にも笑顔で挨拶を交わしていく。

とても犯人には見えない顔だ。

と、その時だった。

「うわあああああああああああああああああああああああ！」

「きゃあああああああああああああああああああああああ！」

絶叫が響いた。即座に零夜が周囲を見回した。

方向は正門。つまり校外だ。すでに何人かの人だかりが出来ている。そこに走り、隙間からその光景を見た。

それは阿鼻叫喚としていた。地獄絵図と言ってもいい。

幾人の人々が斬られ、肉片としてそこに転がっていた。南高と道路を隔てる塀に血糊がべったりとこびり付き、道路は血で溢れ返っていた。

「う・・・」

咽返るような血の生臭い匂いが零夜の鼻孔を突く。それでも双眸はそれを睨み、隅々まで見渡した。

丁度その時和田教師が零夜の後ろにいた。零夜の後に続いたのだ。周りの生徒が寄らないようにその場で生徒を追いつき、携帯電話で警察に連絡する。

すると漸く和田教師は零夜の存在に気付く、

「君！何してるんだ。早く下がちなさい」

と、零夜の腕を掴んだ。が、突然のことで零夜は躓き、体制を崩した。倒れそうになった所を、和田教師が身を挺して転倒を阻止した。しっかりと零夜の腕を持ち、

「しっかりとしなさい」

と持ち上げる。零夜は和田教師のジャケットを掴み、何とか立ち上がる。

「済みません」

弱弱しい声で何とか言い、現場から離れた。和田教師はまだ寄ろうとしている生徒に注意を呼び掛け、警察の到着を待った。

零夜と擦れ違いで他の男性教師も現場へ向かう。辺りは血の匂いが広がり、生徒が寄るためだ。その中には水畑教師もいた。

水畑が零夜を一瞥する。前髪で表情は解らなかったが、その口元は笑って見えた。

零夜は水畑教師を見ると、弱弱しい顔のまま校舎へ向かう。すると、

「零ちゃん！」

葵が校舎から出て駆け寄って来た。すぐに零夜の脇に立ち、腕を掴む。

「大丈夫？」

心配そうに零夜の顔を覗きこんだ。顔色が悪く、足取りも覚束ない。支えが必要だと判断したのだ。

「何で来た？」

弱弱しい声で零夜は言った。辺りは血臭で満たされた。葵にも辛い筈だ。しかし葵はハンカチを口元に当てただけで、零夜を支えていた。

「零ちゃん。酷い物見たんでしょ？」――顔色が悪いよ。
倒れちゃう」

「俺は――」
「いいから。いいから、保健室行こ？」

零夜はそれ以上何も言えず、黙って葵のされるがままになった。

生徒達に緊急集団下校が告げられたのは、零夜が葵と共に教室に戻った直後だった。

悲痛な悲鳴——戦いが始まる（後書き）

白昼堂々と起こった事件。一旦退いた零夜だが、次の行動は大胆なものだった。

突然な家庭訪問——少年の真実（前書き）

事件の影響で全校生徒が緊急集団下校となった。生徒の親達が生徒を迎えに来る。しかし零夜の親はいない。そこで葵は

——・・・

突然な家庭訪問——少年の真実

緊急集団下校で強制的に帰宅した零夜が、後ろを気にしながら階段を上った。トントンと均一なテンポで足音が鳴る。しかしその後ろでトントンと同じ音が鳴った。

零夜は歩きながら眉間を右手で摘み、登り切ったところで後ろを振り向いた。

「なんで付いて来るんだよ、美鈴」

「家の親今日遅いし、家に一人にいるのは怖いんだよ。いいでしょ？ 零ちゃん」

笑顔で言うのは葵だ。下校途中で生徒の親が迎えに来ることは珍しくない。零夜の集団もすぐに皆の親が迎えに来て解散してしまった。零夜は一人暮らした。親はいない。一人で帰宅する羽目になった。実は葵も母親が車で迎えに来ていた。南高の傍で事件が起きて不安になり、不安定だった心が落ち着いたのだろう。すぐに母親に跳び付いた。だがすぐに我に返り、振り向いた。零夜が見ていた。無表情だが、どこか寂しげな雰囲気身を纏い、すぐに帰路を歩き出した。

すると車に乗り込んだ直後、葵の母親が言った。

「葵。ママ仕事抜け出して来ちゃったから、すぐに戻らないといけないの。解ってるわね？」

「うん。一人にしちゃ可哀相だよな」

「ならよし。ほら、二人で行きなさいな。夕飯も——

——どうにかして、ね」

車は少し走り、すぐに停まった。零夜の家の前だ。一分後に零夜が

到着する。零夜は葵に気付くと少し驚いた表情をしたが、すぐに無表情に戻った。葵に話しかけず家に入る。葵もそれに続いた。靴を脱ぎ、階段を登る。

そして今の会話にあたるのだ。当然零夜は葵の親が来ていた事は知っている。確かに見た。なぜ葵が家の前にいるのか疑問だったが、葵が不安であることは間違いない。もしくは零夜が不安定で、支えないと不安だという単なる思い違いをしているかの二つに一つ。

現在の時刻は午後十四時を指している。昼時だ。仕方なく零夜は階段を降りてドアの鍵を施錠し、またすぐに登った。

「上がるか？」

呟くように言う。葵は当然のように、

「うん」

と頷いた。零夜は二階の廊下を歩いてドアを開ける。リビングだ。葵もそれに続き、先を歩く零夜を通り越して電源の切つてある炬燵に歩み寄った。零夜は鞆をリビングに置くと、キッチンに向かう。水を流す音が聞こえた。

葵は炬燵に足を突っ込んでクッションに座ると、

「ねえ零ちゃん。お茶あ」

と強請った。キッチンからは溜息が聞こえ、

「先に手を洗え」

と返る。仕方なく葵は「はい」と返事をし、炬燵から出た。キッチンに向かう。

二階のリビングは古かった。何より古い代から受け継いだ家だ。今は工事をして機械を取り付けたりしているが、内装は古い。それでも十分趣きを感じる所だ。数年前、ここで騒ぎながら零夜と零夜の姉や妹、そして自分で遊んだところだった。零夜が越して九年間、このリビングに入る事が出来なかったが、今は自由に――

――零夜がいる間だけは――――――――――出入りする事が出来る。

または零夜と再び話せる事が出来て嬉しかった。

と、葵が先に手を洗い終わった零夜の隣に立った時、それに気付いた。

「ねえ零ちゃん。何で笑ってるの？」

ピクリと蛇口をひねろうとして伸ばされた手が止まった。だがすぐに動きだし、蛇口をひねる。

「何の事だ？」

流しの場所を代わり、布巾で手を拭う。表情はいつもと変わらない無表情だ。

「何か怖い顔で笑ってたよ？」

心配そうな顔で零夜の顔を覗く。しかし零夜は何気ない表情で布巾を葵に手渡した。

「見間違いだ。――――――――――それより、着替えて来る」

汗が滲んだYシャツは気持ちが悪い。それは解っていた。零夜はリビングを出て三階の自室に向かう。止める気がないのでそのまま行かせた。手を拭き終わった布巾を元掛けられていた場所に掛け直し、

座っていた炬燵に戻る。

「何か隠してる？」

静かになったリビングで、一人で呟いた。が、一人のはずのリビングにもう一つの声がした。

「うん。あれは怪しいよね」

「え？——あつ」

葵の隣には第二者がいた。それに気付いた葵は叫ぼうと口を開けた途端、それを第二者の手に塞がれた。咄嗟のことで抵抗はしたが、相手の顔を知っていたので手出しはしていないのか戸惑った。

「ゴメンゴメン。ここにすること零夜にバレると厄介でさ。ちょっと静かにしててね」

葵が落ち着いたところを見計らい、口から手を放す。

「不法侵入ですよ、水畑先生」

「いやあつ、はは」

そう、第二者とは葵と零夜の担任である水畑・祐樹だ。水畑教師はいつものように笑いながら顔の前で手を合わせた。

「大体、一体どこから入って——」

葵の言葉が失われた。見れば二階のベランダの扉が開いている。扉はガラスで出来ていて、鍵さえ施錠してなければベランダから入れる。しかし問題はベランダだ。ここは二階で、ベランダがあるとい

うことは外の一階部分からはねずみ返しのようになっていて、どう考えても侵入は出来ない。

「いいんだよ。それよりもさ――

知りたくないか？零夜の秘密」

「零ちゃんの、秘密？」

「うん。見逃してないんだろ？さっきの、零夜の笑い方と……その奥にある鈍い光」

「……はい」

水畑教師は声を潜めて、いつもの爽やかな笑顔を消して話しかけた。まるで誘い込むような話術に、葵もいつしか素直に頷いていた。

「都会にいた時、零夜がなんて呼ばれていたか知ってる？」

「いえ――何て？」

「ディアボロ――そう、悪魔」

「あ、悪魔？」

信じられなかった。あの葵より弱く、優しくて、細くて、綺麗で。可愛い顔で笑うあの零夜が、まさかそのような恐ろしい名で呼ばれるなど、想像もしなかった。

「凄かったんだよ。都会にいた時はバツバツと立ち塞がる敵を薙ぎ倒してたなあ。懐かしい。僕が零夜に目を付けたのは、あいつが小学三年生になった時でね――」

「せ、先生は一体、何者なんですか？」

「さあ。何者だろうね。今の話、信じられないって顔してるね。まあそうだろうけど」

「そ、そんなこと……」

葵は思い出していた。あの事を。九年前の卒園式を二週間前に控えたあの日。葵を守るために血に染まりながら奮闘した零夜の姿。僅か五歳にしてあの狂乱な顔が出来るのだ。今、あの感情が零夜に戻ればどうなるか予測がつかない。軽く人一人は確実に命を落とすだろう。

「せ、先生は何が目的なんですか？何でそんな話を、私にするんですか？」

「お、話が早くて助かるよ。君にはね、零夜を止めて・・・助けてほしいんだ」

水畑教師は一瞬だけ視線を鋭くして上の三階を睨む。すぐに視線を戻し、ポケットから鍵を取り出した。葵に手渡す。

「今日の午後二十三時、アイツは動くよ。あ、それは南高の裏門の鍵ね。あとこれ」

小さく折り畳まれた一枚の紙を手渡す。

「十分前にはそこに書いてある場所に行つてね。多分来るから」

「誰が？」

「零夜が」

「何で？」

「じきに解るさ。あ、この事は零夜に秘密にしてね」

再び爽やかな笑みを浮かべると、入って来た二階のガラス戸を閉める。ベランダの柵に手を掛け、葵を見て、じゃ！とシユタと手を上げ、そのまま水畑教師は落ちて行った。

「え！？」

驚き、思わず立ち上がってガラス戸から外を見た。見れば水畑教師はすでに着地を終え、家から全力疾走で遠ざかっていた。

突然な家庭訪問——少年の真実（後書き）

水畑教師が伝えた情報は真実なのか。その日の夜、ついに零夜が動く。

不気味な夜——幼馴染の変貌（前書き）

水畑教師から指定された時間。深夜の南高に来る事。それが零夜の秘密を知ることだった。言われた通り深夜の南高に足を踏み入れるが——

不気味な夜——幼馴染の変貌

「調べはついたのか？」

その日の夜、再び屋上で密会を開く。水畑教師は闇に紛れて現れ、零夜の前に姿を見せた。

「ああ。必要な情報は全て揃った。この書類にある」

水畑教師は書類と共に、ビニール袋に入れた衣類を手渡した。

「これは？」

「僕が昔着ていた物だ。夜の闇にまぎれて隠蔽にはなる」

「そうか。助かる」

数枚の書類に目を通し、零夜は家の中に戻ろうとした。その時、水畑教師の一言で足を止めた。

「……あの娘、美鈴・葵さんだっけ？——巻き込みたい？」
「何？」

無表情で水畑教師に対応していた零夜の顔に、少し表情が現れた。ゆっくりと振り向き、水畑を見た。闇夜に包まれ顔は見えないが、笑っていた。

「どう言う事だ？」

「最近よく一緒にいるじゃないか。入学式前から一緒にいたな。幼馴染だっけ？」

「情報源は清涼の野郎か。今度会ったら叩くか」

「我が弟はお前の拳じゃ砕けないよ。砕けるとしたら春さんくらいかな。―――けど興味深いな。小中学校であまり人付き合いをしたことないお前の幼馴染か。いい子だね、美鈴さん」

面白そうに笑う水畑教師に、零夜はそっぽを向けて階段に戻ろうとした。扉を開け、言った。

「あいつは関係ない。―――だが巻き込んだりすれば、アンタでも関係ない。消すぞ………！」

鋭利な双眸を水畑教師に向け、静かに扉を閉めた。

「おっかないな。あいつ」

潜み笑いを浮かべ、いつしか他に誰もいなくなった屋上から水畑教師の姿は消えていた。

午後二十三時前。葵は持ち前の身軽さで物音一つ立てずに南高の裏に移動し、水畑教師から預かった裏門の鍵で開け、校内に侵入する。春の夜風が体を撫でる。茶髪のポニーテールが風に揺れ、服も揺れる。夜ということで黒を主にTシャツとGパンを選び、腰にはポシエットを付けている。全て黒だ。

息を潜め、足音を立てずに通路を歩く。深夜帯の学校は不気味な雰

困気を纏い、葵には近づき難い建築物へと発展させた。

職員用の玄関まで歩き、一体何が始まるのか考えた。しかしそれは一瞬で終わった。深夜の時間帯で校内の校舎全ての灯りが消灯し、静まりかえっている。すると職員用玄関から靴音が聞こえたのだ。まっすぐこちらまで向かっている。この深夜で校内にいるのはまずい。今朝には殺人事件が起きたばかりで大人は警戒態勢をしいている。そして何よりここで見つければ水畑教師の言った本当のことを知る事は出来ない。葵は咄嗟に茂みに飛び込み、身を潜めた。緊張感が葵の心臓を打ち鳴らす。

その五秒後、職員用玄関が開いた。鍵は開いているようですぐに開く。しかし消灯しているため、手動だ。まっすぐに伸びた五本の指が扉を掴み、それはぬっと現れた。

「あ……」

出て来たのは水畑教師だった。ただいつものヘラヘラとした笑みを消し、真面目な表情で玄関を閉めて通路を歩く。葵が侵入した裏門の方面だ。葵はすぐに声をかけようとしたが、あることによって中断させられた。

職員用玄関が、開いたのだ。水畑教師でもなく、葵でもない。第三者に。

「和田……………先生？」

なぜ先生の後に疑問を発するのか。それはあまりにも今朝見た和田教師の顔とは懸け離れた相貌だったからである。

双眸はまるで蛇の様に吊り上り、大きく開いた口腔から唾液を垂らして顎を汚している。その形相は、獲物を求める獣の如く変化しているのだ。

顔だけ扉から出し、鎌首を擡げ、今出た水畑教師の背中を見て笑っ

た。

「ひっ——！」

思わず声を出しそうになり、咄嗟に両手で口を覆った。だがもう遅い。和田教師は小さな悲鳴を聞き、茂みにその視線を向けた。葵が隠れている茂みだ。

そしてニンマリと笑ったのだ。茂みを通して葵は和田教師の顔が見えている。完全に腰が抜け、ガタガタと体が震えた。押さえている口でさえ奥歯がガチガチと鳴り、恐怖で支配されている。

完全に脚が動かない。和田教師はそれを察しているのか、葵に向けて一歩踏み出した。

しかし次の瞬間だった。ビクンと和田教師の体が震えた。そして鋭く校庭を見やった。校庭の先には正門があり、その正門から誰かが堂々として来たのだ。閉まっている門をよじ登って越えると、校庭を歩いた。水畑教師ではない。他の者、第四者の登場だ。

和田教師はそれを見ると舌打ちするかのように顔を顰め、渋々後退して職員玄関の扉を閉めた。また校舎の闇に姿を消したのだ。

一方葵は和田教師の金縛りのような恐怖から解放され、一息付いた。そして和田教師が見た方向、校庭を凝視した。暗闇の中、月明かりで顔は見えない。

その者は職員玄関まで歩いた。やっと姿が解る。ダークスーツに身を包む小柄な者だった。双眸は夜であるのにも関わらず、サングラスで隠している。しかしそれが誰か理解する時が来た。横を向いた時だった。サングラスの隙間から目が解る。

「零……ちゃ……ん」

そう。零夜だった。何とも、その女子に似た顔をサングラスで隠し、黒いスーツに実を包んだその姿

は、何とも近寄りがたい雰囲気を出している。否、何よりもあんな自分よりも弱い幼馴染が、こんなに変貌してしまう事が何よりもショックだった。

そして零夜は、少し辺りを警戒するようび眺めると、ゆっくりと職員玄関に入って行った。その姿も凛々しく、様になっている。葵は少しの間唖然としていたが、ハッと我に帰り、この先をどうするかを考えた。

そして、入ろう！と決意した瞬間、また水畑教師が現われた。水畑教師は躊躇無く、職員玄関から入った。

「な、何なの？この人たちは」

もう誰も来ないことを確認し、葵は渋々職員玄関から校舎に入った。

校舎は、静寂を保っていた。何故、静かなのか。答えは簡単だ。この校舎には四人しかいないからだ。

和田教師はどこかに潜んでいる。零夜もどこかにいる。今、葵は水畑を成り行きで付けていた。理由は簡単だ。他の二人は見失い、身近にいた水畑を付けるしかなかったからだ。夜の校舎に、水畑の場違いな紅いスーツが月光を受けて踊っている。そのダンスに合わせて、葵は歩幅を調節して尾行した。別に見つかっても何も問題はなし、支障はないのだが、何をやるかが不明だ。それを確認するまで存在を明かせない。

今、どこを歩いているのか。職員玄関の手前にある階段を二階分登り、現在三階にいる。そしていまいる第一校舎から第三校舎を繋いで移動する廊下を歩いている時だった。水畑は一度足を止めた。葵は急いで廊下の入り口の壁に伏せた。幸い、月光が葵に当たっていないために視認は不可能だ。しかし、水畑はニヤツと笑ったのだ。さらに、廊下を一気に駆け抜けた。

「あ！」

不意を突かれ、葵は一瞬出るのが遅れた。水畑教師の走り方は速い。あれだけの速度で足音を立てずに走るのは訓練を重ねなければ不可能だった。葵もそれを知っている。だが今水畑教師を見失うのは悪手だ。素早く壁から身を離し、水畑教師を追おうと脚に力を入れた。

しかし、一気に顔が青ざめた。

「美鈴さん？何してるの」

全身から力が抜けるのが解った。背中に冷たいものが走り、首の後ろがチリチリした。心臓が早鐘の様に鳴り響き、脳全体に危険を知らせる。

「わ……だ、先生………」

和田教師がいつの間にか葵すぐの背後にいた。音も気配も無く。振り向いてはいけなさと理解しつつ、ゆっくりと首を横に向けてしまった。そこには純白のスーツを身に纏う和田教師がいた。ただ変貌はしていない。今朝と変わらない穏やかな顔だった。

「ん？どうしたんだい？」

ゆつくりと和田教師は葵に向けて歩んで来る。いつも通りの優しい笑顔。そう、あれは見間違いなのだと思います、安心した。

だがそれは間違いだった。

「何をしていると聞いているんだがねえ……」

和田教師の瞳孔が、細く縦長に変化していた。

「わ……だせ……うぐつ？」

息が詰まった。違う、止められた。自己意識で止めているのではない。体全体を何かで締め上げられる様な、息が出来ない苦痛だ。

「駄目………じゃないかあ————夜に学校に来ちゃあつ
！」

ついに、正体を明かすような変貌を見せた。汚く笑い、大きな口から涎を撒き散らし、蛇のような目で葵を睨め付けた。

「や……あっあぐ！」

悲鳴を上げようとしたが、何かに締め上げられている為声が出せない。足の感覚が無くなった。違う、浮いているのだ。体を見下ろすと紫色の太い何かが体に巻きつき、締め上げている。大蛇だった。なぜ何もないところから大蛇がいて、自分を締め上げるのか不可解だった。

「さあて、何が目的だい？」

和田教師は汚く笑うと、顔を葵に近付けた。葵は苦痛で目を閉じている。締め上げる力は次第に強くなり、肺の中の空気が口から吐き出される。呼吸さえ困難になり、意識が揺れた。

しかし、冷たい感覚が近付いている。思わず眼を開けた。和田の顔がすぐそこにあつた。悪寒が体を貫いた。朦朧とする意識の中、抵抗を試みるも失敗に終わる。

もう駄目かな。そう思えた時だった。

「うあ……っ」

大蛇の締め付けが緩んだ。それを疑問に思うよりも早く、何かに腕を掴まれ、力強く引つ張られた。人の手だと解る。直後、柔らかに抱きかかえられた。

それが誰なのかと、ゆっくりと視線を上げた。和田教師ではない。

水畑教師でもない。

零夜だった。

「れ……い………？」

「———っ」

葵を抱きかかえる零夜は、胸に抱く葵を一瞥し、一瞬だけ辛そうに顔を顰めた。しかしすぐに無表情になり、眼前の和田教師を睨む。

今の零夜の顔にサングラスはなく、にび色の瞳が月光を受けて妖しく輝いた。瞳だけでない。ダークスーツに身を包む零夜の美しい相貌が、淡い月光を受けてうつすらと闇に浮かんだ。和田教師は驚いた表情で零夜を見下ろした。

そして零夜は立ち上がった。同年代で身長差もあまりない葵を軽々と持ち上げる。

「貴様等は、いつもそうだな」

ここで初めて、零夜が口を開けた。

「あぁん？」

和田教師が顎を突き上げ、小柄な零夜を見下す。

「力の弱い奴等を狙って、次々と甚振り殺す。――趣味は変態だな」

冷たく言い放った。無表情の顔には何も表情はない。が、言葉には嘲笑と憎悪が込められ、殺意さえ浮かんでいた。しかし、和田教師はその言葉をもろともしない。逆に喜んでいるように汚く笑った。

「最近起こっている連続殺人。アンタが犯人なんだろう？」

「え？」

葵が小さく声を漏らし、零夜を見上げた。そこで漸く葵に気付き、床に降ろした。葵はまだ意識はあるようだ。しかし体力が無い。ぐったりと零夜に凭れ掛った。

「アンタの手持ちと手段は調べた。まず、そこに転がってる蛇」

気付けば葵を締め上げていた大蛇は床に昏倒していた。強い打撃を受けたのか、口を開けて長い身体を痙攣させていた。

「他にも色々あるぞ。それと、そのスーツ」

葵を支えていた右手で和多教師の純白のスーツを指差した。ピクリと和田教師の柳眉が動き、少し顔を顰める。

「面白い方法を使っただな。まさか変化形まで持っているとは。久しぶりに見た」

ヒュッと空気を切る音がした。零夜の左手だった。次の瞬間に和田教師の「うつ」と唸り声も聞こえた。

バタフライナイフだ。零夜が素早くナイフを取り出し、左手で投げた。バタフライナイフは何と和田教師の腹に直撃する。葵は小さく悲鳴を上げた。

今起きた二つの事に驚いていた。一つ。平気でナイフを投げる零夜。一つ。何よりそのナイフを腹に受けて血の一滴も流さない和田教師だ。一瞬顔を顰めるも、それは演技だと解った。腹に刺さったナイフが揺れた。しかし揺れたのはナイフだけではない。純白のスーツも揺れた。模様はない。身をくねらせたわけでもない。和田教師は笑みを浮かべて立っている。数回スーツが揺れるとナイフの刃がゆっくりと和田教師の身体から離れ、カランと音を立てて床に落ちた。ナイフの刃には血の一滴も付着していなかった。

「これが証拠となったな」

クククと零夜は冷笑を浮かべる。それが不快なのか、和田教師は笑みを消した。

「いつ気付いた？」

汚い顔のまま零夜に問う。

「舐めるなよ汚い人外。アンタに支えられた時、俺はわざとこけよ

うとしていた。そしてアンタが案の定支えてくれた。

——いや、支えなくちゃいけなかった」

「どういうことだ？」

「まずアンタ、ここの教師じゃないだろ？」

「……………」

次々と言葉を言い放つ零夜。それを黙って受ける和田教師。不安げに零夜を見上げる葵。零夜の顔は、最早、葵の知っている零夜の顔ではなかった。

「どうやって就任したかは知らないが、アンタのその汚く腐れた趣味を実行するには、教師と言う立場が一番手っ取り早い。違うか？」

零夜は、黒く笑っている。他人の不幸は蜜の味。傷を広げることが楽しいかのように笑っていた。

「教師と言う立場なら、評判さえ良ければ信用もあるしなあ。影から人を殺めてりゃ、そりゃ誰だってアンタを疑わないさ」

少し棘のある言い方だが、これが一番方法が良い。

「教師として生徒を庇うのは当然だろ。転びそようになった俺を助けるのは当然」

零夜は笑うが、和田も笑った。

「助けてもらった時、俺はアンタの服に触った。何故なら、確かめる必要があったからさ」

ここから、零夜の推理が始まった。

「まず、アンタはこの学校を休みすぎだ。その休んでいる間に殺人を犯してきた事はバレバレだが、アンタには信用がある。誰もアンタを疑わんさ」

零夜は和田に指を突きつけた。

「しかしだがな、死体は切り傷が致命傷となっている。では、何故アンタはその返り血を浴びない？ 奴共だとしても、数々の技を繰り出す、アンタの指示がないと動けない。警察も、奴共が自的にやった事だと思ってるが、それは勘違いだな」

「あ？」

「その場に誰もいなかった？ 違うね、アンタもその場にいたんだ。そして奴共に指示を送った」

「なら、テメエの言う、返り血はどうした？ 俺は浴びてるんじゃないかったのか？」

最早、口調でさえ狂っている。唾を飛ばしながら、零夜に噛み付くように口を開いている。

「落ち着けよ俗物野郎。さっきも言っただろ？——その服、変化形だつて」

「証拠は何だよ？」

「それもさつき確かめた」

零夜は和田が引き抜いたナイフを指差した。

「その服の証拠は二つ。まず、感触。俺が触れた時、それは服ではありえない感触がした。そして物的証拠が、ナイフ」

刺したが、受け止め、装備者に傷をつけさせない。故に変化形なのだ。

「アンタは真正面から人を殺し、返り血を浴びた。顔なら洗えば良い。しかし、服では血は染み付いてしまう。さらに、今の科学でその拭き取って色素の無くなってしまった服でも、血の成分は発見出来るさ。そこで、アンタ――服の上から被せてるんだろ？変化させた、変化形の魔物を服にしてな！」

グツと和田教師は奥歯を噛み、一步後退った。

「その魔物をひっぺ剥がせば露になるはずだ。返り血に汚れた、アンタのスーツがな」

「くっ！」

叫ぶようにして放たれた言葉。その後は零夜は落ち着いた顔で、

「大人しく、投降しろ」

と言い放った。

葵は正直、関心と恐怖を抱いていた。幼馴染のひ弱な優男が、ここまで変わっていたのだ。ナイフを投げる幼馴染。自分を優しく抱いて救出した幼馴染。黒く笑い、推理をする幼馴染。驚いたし、怖かった。

とどめのをさされた和田教師は黙っていた。が、次の瞬間に糸が切れたかのように狂いだした。

「あっひゃひゃひゃひゃッ！」

高く、不気味に笑い始めたのだ。

不気味な夜——幼馴染の変貌（後書き）

和田教師の本性が明らかに。凶暴と化して襲い掛かって来る。零夜と葵はどう対処するのか。和田教師の卑劣な行為に、葵がぶち切れる。

激烈な月夜——大事な人を守りたい（前書き）

ついに和田教師との戦いが始まった。しかし傷を負った零夜は一時退却を選択。兎に角一番に葵を守るという一心で、零夜は和田教師と再び対峙した。

激烈な月夜——大事な人を守りたい

「零ちゃん……零ちゃん……」

小さく彼の名を呼ぶ。しかし彼は頂垂れていた。その原因は彼の左肩の出血で、今も少量だが垂れ流れて小さな血の水溜りを作った。

「で」

零夜がここで初めて反応し、口を開いた。しかしその声は小さく、聞きとれたものではない。

「え、何？」

葵が零夜の口に耳を近づける。零夜も苛立ちを覚え、声を荒げた。

「何で君がここにいるんだ」

零夜の口調は明らかに怒っている。その理由は明らかに自分だと解っていた。故に「あ、う」と言葉に詰まり、濁らせた返事しか出来なかった。

そして濁らせた理由はそれだけではない。水畑教師との約束もあった。誰にも、特に零夜に言っではいけないという一方的な約束を押しつけられ、葵は今ここにいた。

二人は四号館の食堂にいた。その食堂の奥のスペースに、身を隠しているのだ。零夜は葵が沈黙を続けると、フーと息を吐いた。

「兎に角、ここは危険だから君は逃げろ。俺が囿になる」

「だ、駄目だよ！」

焦って反論する。零夜の腕を掴んだが、払い落された。

「帰れ！」

眉間に皺を寄せ、眼を鋭くして言った。これは、今まで葵に見せた事の無い表情だった。忽ち恐怖に身を縮ませる葵だったが、すぐにまた反論した。

「大体、その体で何が出来るの？私、今零ちゃんと素手で戦うってことになったら、どっちが勝つかくらい、解るでしょ？」

「——っ」

「私が帰るのは、零ちゃんと一緒だよ？絶対だよ」

零夜と視線を合わせて硬く意思を示した。零夜は口を開いて何かを言おうとしたが、言えなかった。思わず視線を反らす。その代わり、己の退路と扉を見て舌打ちした。

「——しまった」

後悔した。零夜は失態を思い知った。傷を負った際にぶちまけた鮮血。それが床に滴り、退路に落ちてしまった。跡を残してしまった。あの時零夜は思わず葵を庇い、守る事を優先としていて退路の血液に気付かなかったのだ。

そしてそれを追い、和田教師が追って来るだろうと予想した。

「兎に角、君はここにいろ」

鋭く指摘し、零夜は立ち上がった。負傷した左肩を右手で覆い、左手をポケットに入れた。

葵も立ち上がろうとする。だが足が動かないことに気付いた。足だけではない。腕も背中もだ。

「え———な、何これ」

四肢にどれだけ力を込めても動く事が出来なかった。まるでその場に張り付けられたようで、気味が悪かった。

零夜に助けを求めて視線を零夜に向けた時、零夜はボソツと呟いた。

「彼女を———葵を、守ってくれ」

次の瞬間、葵を縛る何かが揺れた。まるで零夜の声に反応したかのように、空気が動いたようだ。

零夜は頷き、食堂を後にした。

景色が高い。夜風が熱い。そして———目の前にいるクソツたれを消し去ってやりたい。そんな原始的暴力衝動に突き動かされ、しかしそれを隠して無表情で零夜は眼前に立っている和田教師を睨む。

「貴様達の目的は高が知れてる」

「達い？俺は一人で行動してるぜえ」

「だが、何らかのバックアップがいただろう」
「もう、そんな野郎共は関係ねえっ」

罵声が零夜に飛んだ。それでも零夜は眉一つ動かさない。冷たい無表情で和多教師を睨み続け、一度目を閉じた。そしてふうと一息つき、もう一度眼を開いた。

夜景が眼に広がる。そう、零夜と和田教師は学校の屋上にいた。途中までの血液を拭き取り、違和感がない位置にまた血を流し始めた。屋上へと続く階段に向かう。すると和田教師は見事に誘われ、五分後に屋上の扉を押し開けた。

ここなら思いきり戦える。再び止血を施し、右手を握る。左手はポケットに入れたままだった。

「ああ、そうかよ」

すると零夜の表情に変化が起こった。唇の端が釣り上がり、笑みを浮かべた。それは闇夜に同調する、どこか鋭利で冷気を帯びた笑み。冷笑だ。

「さて、どこまで通用するか……だな」

二人の影が屋上で踊りだした。

「う……いい加減放してよ」

その場で暴れてみるが、葵を拘束する見えない何は葵を離す気配はない。元々気配がない上、掴んでいるのは服だ。ズボンとシャツのところどころをまるで床に縫い付けたかと思わせるくらい硬く張り付いていた。

「あの出血で……もしかしたら、零ちゃん死んじゃうよ！」

葵の我慢は、ついに頂点に達した。張り付いているのは床で、葵の下には大きな影が映っていた。そのまま影を踏みつけてやる。と、足を持ち上げようとした。

その時だった。ギィと、手前の扉が開いた。急いで足を下げ、身を潜めた。
しかし、

「あ、大丈夫。僕は味方だから」

覚えのある声が扉の向こうから聞こえた。

「遅いですよ」

葵はムスツと顔を顰めた。

「ゴメンゴメン」

顔を顰めた葵に両手を合わせて謝罪したのは、水畑教師だった。水畑教師は苦笑いを浮かべた後、呆れた表情に戻り、問う。

「それよりも、何であいつについてない訳？」

「何か、見えない何かに捕まっちゃって。捕まっても零ちゃん助け
てくれないし」

「……あんにやろう」

こちらも顔を顰めて天井を仰ぐ。葵に歩み寄り、大きな影を軽く靴
の爪先で叩いた。

「もしもし零夜の影くん。僕が来たから彼女の拘束を解いてくれな
いかな？」

と、見えない何かに言った。見えない何かは空気を揺らして意を表
すると、葵の服を床から離れた。拘束を解かれ、自由になった葵は
やっと一息付き、水畑教師から差し出された手に掴まって立ちあが
った。

「あいつは屋上にいる」

「え？なんで……」

「戦っためさ。君がいたのでは全力を出せないだろ？」

あんな傷ついた体で何が出来たのか。という呆れを口にはしなかつ
たものの、戦いという発言には不安を覚えた。和田教師は完全にい
かれている。今なら人一人殺しかねない。傷を負った零夜はただで
さえ体格的にも不利があるというのにも関わらず、勇敢なのか無謀
なのか、葵を置いて食堂を出たのだ。今はとにかく無事でいてほし
い。それだけを考える。

食堂を出て水畑教師と共に廊下を走り、数分後には零夜の血痕を発
見した。それは階段まで続き、水畑教師はそれがどこに行きつくの
かを再確認した。

「やはり、屋上か」

呟くと、階段を駆け昇り始めた。葵も必死に階段を駆け上る。中学生時代から運動部の訓練で何万回も階段を駆け上がり、もう慣れたと思ったものだ。しかし、今は緊張しているのか足が重く感じ、いつもよりも体力を消耗した。息が荒く、足音も大きくなる。水畑教師との距離が離れた。

やっと水畑教師に追いついたのは一分後で、水畑教師は屋上の扉の前でドアノブを力一杯捻っていた。

「くそう！和田の奴、屋上の鍵を持ってやがったか！」

ガチャガチャと取っ手を回す。しかし、ドアは一向に開かない。

「仕方ない。少し手荒だが――」

と、腰の辺りに手を回す。
しかし、

「退いて！」

何かを取り出すよりも速く、葵の一喝が飛んだ。

「え？――うひゃっ」

「っああッ！」

水畑が悲鳴を上げてドアの前から身を引く。次の瞬間、ガイイン！と豪快な音が轟いた。床に、ガランと落ちる音がした。

「うわぁ……」

水畑が青い顔で葵を見つめた。

葵が何をしたか。至近距離からの回し蹴りだ。それは綺麗な旋円を描き、ドアの取っ手を、取っ手ごと破壊し、水畑の後頭部を掠めた。勿論取っ手はグシャグシャに拉げて床に落ちた。更には水畑が感想を述べるよりも速く、葵の体が半身になり、回転した。

「もういつちょッ！」

湯が響き、ドオオオオン！と破壊音が轟く。凄まじい勢いと破壊力を見せつけ、葵の太腿・脹脛・踵が稲妻の如く鉄製のドアをブチ破ったのだ。

否、ブチ破ったのレベルではない。ぶっ飛ばした。と言った方が正確だろう。更に顔を青くさせる水畑教師は「行きますよっ」と叫ぶ葵を視線で追った。水畑教師が我に帰るまで、五秒は必要だった。直後、葵が叫んだ。

「零ちゃん！」

悲鳴に近い絶叫。

「おお。来た来た」

また、ニンマリと笑う和田教師。状況と言えば、屋上の所々に血痕を撒き散らして零夜が倒れていた事だろう。

一方、和田教師はどこにも損傷はなく、白いスーツには埃が付着している。まさに余裕綽々だ。

「弧月はもう使い物にならないだろうなあ」

和田教師は笑って言う。零夜の小柄な体に傷がいくつも確認出来た。辺りには、零夜の物だろう。と思しき血痕が散らばっている。左肩の出血も止まってはいいない。出血量も凄い事は変わらないだろう。

「零ちゃん……」

葵は蒼白な顔で零夜に駆け寄る。零夜は扉に近い所に倒れており、その近くに和田教師が立っている。

しかし零夜に後一步の所で体を反転させた。回し蹴りだ。完全に殺意が込められている。

「うっ」

案の定、油断しきって葵の間合いにいる事に気付いていない和田の腹に、綺麗な回し蹴りが喰い込んだ。

「ッ！」

そのまま脚を引き、両手を床に付けると、両足を揃えて突き出した。その両足の行き先は和田の顔。顎にヒットした。和田の悲鳴が響く。しかし葵の怒りはこれでは収められない。素早く両足で着地すると、体を捻りながら起こした。そのまま腕を振る。

「うっ」

半円を描き、葵の遠心力を利用した左腕の肘鉄が和田の腹に。0・5秒後、今度は逆方向に回転して半円を描き、右手の裏拳を和田の顔面に直撃させ、吹き飛ばした。もう声にならない悲鳴を上げ、数

メートル吹き飛び、フェンスに直撃した。

「……ツス!!」

両腕を引き、構えを取って一喝を体に入れた。もう、これで和田は死んでいるかもしれない。しかし葵は構わず、今度こそ零夜に駆け寄った。

「零ちゃん。零ちゃん」

上半身を抱き起こして叫んだ。

「——スッゲ」

見事な殺人拳の連撃に、素直に恐怖と関心を憶えた。和田は息さえしているものの、もう一撃喰らったら、もうこの世にはいないかもしれない。と、その思考を遮ったのは、零夜の唸り声だった。

「……奴は？」

葵と水畑教師は、和田教師を見た。和田教師はフェンスに埋まりながらも、ゆっくりとそれを掴んで起き上がった。すぐに水畑教師が動く。葵と零夜の前に立つ。

「美鈴さん。零夜を連れて下がって」

両腕を和田教師に向け、顔の半分を葵に向けた。葵はその時水畑教師の頼もしさを体感した。大人に守られ、頼れる嬉しさを噛みしめて零夜を抱く腕に力を込めた。なるべく傷に響かぬよう、そっと上半身を持ち上げる。それでも体全体を持ち上げることは不可能で、

結果的に下半身を引き摺って退避した。

零夜はザリザリと靴が擦れる音と、肌が床に擦れる痛みに呻き、顔を顰めつつも悲鳴をかみ殺し、耐えていた。そしてやっと扉の隣のフェンスに移動した。葵は大きく息をつき、零夜を見下ろした。

改めて見ると、幼馴染の顔は結構イケていた。俗に言う美少年って奴なのだと思う。葵より少しだけ高い身長に、眼の位置にまで伸ばした黒髪に、耳を覆い隠すまで伸ばしたもみ上げ。月明かりを受けて輝く、茶色の瞳。スツと綺麗な鼻梁。何故か白い肌。時折覗かせる首筋も白い。華奢で、優男の様な細身のスタイル。そう、美を象徴とした少年だった。

しかし、結構血が抜けているので顔が青白い。だが月光を受ける顔でも、まだ美を保っている。その変わってしまった美少年、幼馴染を両腕に抱いていて、葵は緊張していた。それは幼馴染や美少年であるからではない。それは弧月・零夜だからこそ、緊張しているのかもしれない。

零ちゃんは私を護ってくれた。

だが、今度は私が零ちゃんを護る。

自然と、零夜を抱く手に力が籠る。喉がヒリヒリする程乾いた。こめかみの血管が、バクバクと脈打つ。それでも和田先生はこちらに歩み寄ってくる。あれだけの打撃を与えたのに聞かず、何て頑丈な体をしているのか。ならば隙を見てさらなる打撃を加えるだけだ。

「おい——— まず俺あ弧月を殺したいんだ。退け」

「悪いけど、退く訳にはいかないんでね」

和田教師の睨みを受けても水畑教師は笑みを崩さない。伸ばした両手を大きく広げ、後ろの葵と零夜を守る意を示す。

それを見ると、先程の怯えた感情が消えた。自然と立ち向かう勇氣

が込み上げて来た。

「ならば最初はお前だ！」

和田教師が腕を振るう。葵は身構える。和田教師の指先は水畑教師の後ろ、葵を向いていたのだ。

次の瞬間、シャーッと言う蛇の様な叫び声が聞こえた。先程の大蛇だ。再来したのか。と思つて水畑教師は思わず振り向いた。それが間違ひだった。

「がつ！」

水畑教師は横から与えられた打撃で大きく吹き飛んだ。悲鳴を上げ、その方向を睨む。確かに大蛇は再来していた。ただし葵付近でなく、水畑の横から現れた。フェイントだ。葵に意識を集中させて気配の探索を中止させる。そして無防備になった水畑教師を襲った。打撃は大蛇の長い尾だった。鞭のように撓ったそれは真横から水畑教師の腹を捕え、力任せに薙ぎ払った。

余程の衝撃だったのだらう。水畑教師はフェンスの金網を突き破り、四階の屋上から地上まで落下した。

「先生っ！」

悲鳴に似た声を上げる。助けに行こうと思つた時にはもう遅い。水畑教師は落下していた。数秒後、重い落下音が響く。

「あつ——」

終わったと思つた。だがそれよりも強い感情が湧き上がった。幼馴染の零夜を傷付け、教師である水畑までも手に掛けた。許さない。

「あいつが今は面倒くさいからなあ」

どうやら和田教師は水畑教師の事を知っているらしい。教師としてではなく、もつと別な意味での知識だろう。だが今はそんな事は関係ない。戦えるのは葵だけ。女子だと思って甘く見ていると、本当に命を落としかねない。それは先程の襲撃で理解させた。大蛇召喚やナイフが刺さっていても平気だったという非現実的な事件を目の当たりにしても、葵は退く訳にはいかなかった。

「一対一^{サシ}か……」

それも、悪くない。

しかし、和田教師の傍には大蛇がいる。今の攻撃で十分危険で警戒しなければならぬ相手だと理解していたが、今の葵に大蛇は眼中になかった。本丸を叩く。和田教師を殺してでも止めなければならぬと決意し、拳を握る。己の全体術を駆使し、和田教師を消す。

「ふっ」

葵は零夜をフェンスに座らせ、疾走した。和田教師は微笑を浮かべている。その余裕な顔が、苦痛に変わる所を想像出来た。

葵は大蛇の尾の攻撃の間合いに入る。和田教師は右手を振って合図する。大蛇が床を這って前進した。

尾が振るわれるタイミングを計り、微動した瞬間を葵の恐るべき反射速度が捕えた。横薙ぎだ。水畑教師を屋上から叩き落とした早業。横薙ぎの尾が葵の頭部に向かうが、葵はそれを見切っていた。素早く頭を下げて初撃を回避。大蛇がそれに気付く前にさらに前進した。大蛇が気付いた時には葵は眼前にいた。大蛇はならばとばかりに大

口を開けて葵を飲み込もうとするが、葵の方が速い。大口を開ける前に右手を顎の下に潜り込ませていた。開いた瞬間、右手の掌底を顎に叩き込む。いきなり口を閉じられた大蛇は怯み、退避した。まるで人の意思を持っているかのような動きだ。

だが葵は退避することも許さない。その間合いをすぐに詰め、大きく振り上げた右足を振り下ろす。

激烈な月夜———大事な人を守りたい（後書き）

しぶとく復活する和田教師。数回に渡る葵の連撃は無駄に終わった。和田教師はジワリジワリと零夜を追い詰める。しかしそれは零夜の反撃開始の合図だった。立ち上がる零夜の力が、明らかに……！

非現実的な化物——悪魔と発狂者（前書き）

和田教師が従える大蛇を鎮めるために連撃を加える葵。しかし和田教師に攻撃は届いたものの、通用しない。その時和田教師は奇妙な事を言い始めた。そして零夜が本気で切れ——

大きく振り上げた右足を振り下ろした足が、吸い込まれるように大蛇の頭部を捕える。踵が頭部に突き刺さり、大蛇は圧迫に抗えず無力にも床に叩き付けられた。踵落としから踏み付けた。靴越しに大蛇の顎骨は碎ける感触が伝わる。葵に戦慄が走った。さらなる獲物、本丸の和田教師を狙った。

和田教師が思い浮かべていたのは、驚愕と絶望に支配される葵の顔だろう。しかし、今のその想像を打ち砕いた。普通の女子高生よりも遙かに高い身体能力で容易く大蛇を片付けたことは予想外であり、党の和田教師も啞然とした表情を浮かべていた。

まだ動いていない和田教師との距離を一気に詰め、更に左足を踏み入れる。「フツ！」と自身の体に一喝を入れ、全身の体重を前に出ている左腕の肘に乗せ、そのまま撃ち出した。全身の力、体重、遠心力を利用した、自身が誇る痛恨の一撃を見舞った。そのまま、打ち出された和田教師は、先程衝突したフェンスに再度衝突し、屋上から落下する。と、予測していた。

案の定、和田教師の体は簡単に吹き飛んだ。そしてフェンスに衝突。脆くなったフェンスは外れ、和田教師は屋上から追放された。そして、終には嫌な落下音と悲鳴

が、しなかった。葵は疑問に思い、フェンスの側に歩み寄った。そして眼を疑った。

「痛いなあ……」

和田教師は、いた。フェンスではない。校舎の壁に張り付いている。身に着けていた純白のコートがまるでガムのように引き延ばされ、フェンスに絡まっていた。それを右手で掴み、左手と両足を壁に這

わしている。まるで蜘蛛だ。

見下ろしている葵を見上げ、和田教師は妖しく笑った。

「そんな……ひゃっ！」

いきなり、グン！と後ろに引張られた。次の瞬間、葵が立っていたところが大きく挟まれた。物凄い力でコンクリートと鉄筋を裂いたような跡がそこに残っていた。

「馬鹿っ！死にたいのか」

罵声が耳元で響く。息絶え絶えだが、一番聞きたい声だ。零夜だった。いつのまにか葵の背後まで駆け寄り、今の攻撃から助けた。そして後ろを確認し、屋上の扉が無事なことを確認する。

「兎に角、君は逃げろ」

「出来ない」

葵はきつぱりと言った。意外だったのだろう。零夜は一瞬啞然とした。しかしすぐに我に返り、

「俺が囷になる。数秒は持つから、屋上のあの扉から逃げろ」

「嫌、逃げたくない」

はつきりとした声が零夜を苛つかせた。

「なら、脱出しろ」

「逃げる事と同等な意味だよ」

「言い方を変えようか。足手まといだよ」

「あら。そうかな？今、私は零ちゃんでも倒せなかった和田先生を

突き落としたよ?」

「失敗したろ」

「でも、零ちゃんよりマシね」

もう、口では零夜は勝ち目が無い。ならばと目付きを鋭くし、より一層雰囲気を変え、トーンを思いっきり下げて、唸るように言った。

「去れ。君は、邪魔にしかすぎない存在だ」

「でも、零ちゃんを放っていけない」

「——っ！」

零夜は、眼を見開いていた。悲しそうで、愛しそうで、絶望を感じていそう。しかし、希望を奥に秘めている視線を向けていた。

「零ちゃん?」

「葵。君は——くっ！」

零夜が再び葵を抱いた。バックステップで後退し、破れたフェンスから遠ざかる。

「マァ……だ、まだだぞぉ?」

和田教師が、屋上に這い上がってきた。破れた純白のスーツを破り捨てる。そのスーツが床に堕ちた途端に、何と一瞬で消え失せた。その代わりに血で汚れたスーツが露わになる。

「葵、和田は狂ってる。俺が引き付けるから。その間に、頼むから君だけでも……」

和田教師から十分な距離を取った後、零夜は葵を包んでいた右腕を

離れた。しかし零夜はそのまま力なく膝を付いていた。今度は葵が零夜を支える番になっていた。限界に近い体を叱咤し、零夜は葵を助けたのだろう。双眸から光は消えてないが、体が震えている。力を入れようにも体に限界が来ている。エンジンが無事でもパーツが粉々では機械は動かない。今零夜の体はボロボロで、力の伝達でさえ出来ない状態だった。数秒後、ガクンと体の力が抜けて倒れる

「零ちゃん！」

ここで、零夜は気を失った。出血が激しい。傷も所々広がっている。非常に危険だ。更に、もっと危険な事態が襲った。

「あーあ、孤月は死んだか」

和田教師が歩み寄ってくる。葵が零夜をフェンスの近くに座らせ、立ち上がって構えた。

「おおお。そいつを守ろうと？感動するねえ」

だらり、と舌を出して笑った。更に悪寒が背筋を走る。

「しかし、奴らは使い様だ。孤月はうまく扱えてないようだなあ。

さては捧げ物してねえんじゃねえのか？そうだとしたら、単なる馬鹿か。ガソリン入れずに車が走るかよ」

「は？」

和田教師はいきなり意味不明なことを話し始めた。何を言っているのだろうこの人は。と葵は不審な目で和多教師を見た。

「まあそりゃそうか。こんな餓鬼に扱えるはずねえもんな。奴らは

気まぐれで、無駄にプライドが高い。捧げ物なしで動かそうって考えはまだまだ餓鬼の甘さだな。それが敗因だあ」

言い終わると、和田教師は葵を見た。その表情は意外そうな顔で、まだいたのか？と言いたげな感じだった。

「と、言っても俺もまだ楽しみたいしなあ。今の美鈴さんじゃ、楽しめそうにないよなあ」

困った顔で呟く。狂っているのは解るが、ここまで本気の顔されるとこちらがリアクションに困った。しかしここで退く訳にはいかない。

「舐めないで」

拳を軽く握り、右足の爪先に力を入れる。すぐに前に走れるように。

「満たされたいし————そうだあ。お前、契約者になる気はないか？」
コントラクター

ぱあっと表情が明るくなる。無邪気な子供のような顔だ。しかし葵から見れば変人だ。支離滅裂な言葉をコミュニケーションの一切を破棄して投げかけ、一方的に喜んでいるきちがい。

「契約者とかさつきから訳の解らない事を————テレビア
ニメの見過ぎなんじゃない？」

「馬鹿言え。現実さ。リアルで奴等と呼び出して操って。気持ちいいぞあ」

「変な趣味ね。非現実的な妄想で現実逃避？悪趣味にも程があるわ」
「いいかあ。まずは自分の心を見つめろ。そこに一冊の本がある。」

白い本だ。それを開いて――何が見える？その何かが見えたら君は契約者だあ！」

葵の嘲笑にも耳を貸さず、再び一方的な授業を開始した。否、授業ではなく下手な洗脳なのだろう。結局は自己満足にしかすぎない。が、その直後。和田教師の顔面にコンクリートの塊が直撃した。葵ではない。葵の後ろからだ。

「貴様の考えには反吐が出る。どう言うつもりだ」

零夜だった。いつの間に意識を取り戻したのか、傍にあったコンクリートを掴み、投げた。和田教師は葵から視線を外し、再び面白そうな顔をして零夜を見た。

「あ？」

「一般人を眠りから覚ましてどうする！それは暗黙の了解だろう」「愉しむのさ」

けらけらと笑う和田教師に、ついに零夜が切れた。強引に錆びたフエンスの金網を掴み、歯を食いしばって立ちあがる。

「相容れなかったら、どうする！命に関わるんだぞ！」

「俺にやあ知らねえよ。俺は、強い奴と戦い、弱い奴を殺したいだけさあ」

グツと一步を踏み出す。葵よりも前に出ると、葵を後ろに下げた。その眼には力強い意思が込められ、怒りと決意が示されていた。

「そこまで言うなら致し方ない。――いいだろう。本気で相手になってやる」

今までポケットの中に入れていた左手を取り出した。葵が不安な眼でそれを見つめ、和田教師はさらに深い笑みを浮かべて見ていた。葵は零夜に近付けなかった。生物的な本能が告げている。何かが違う。今までの弱かった零夜の、何かが変わろうとしている。葵の零夜が、葵の中で変化をしようとしている。本当ならばそれを止めたい。だが止められない。体が動かない。声を出して引き留めたい。だが喉からは風の鳴る音しか出ない。まるで声帯を失ったようだ。そして今、葵の目の前で信じがたい現象が起きた。

「ぐっ……」

零夜が呻く。取り出された左腕はまっすぐ横に伸ばされ、指は上に月を指していた。

その指が、手が、消えた。まるでマジックのようにじわりと炎に焼かれ、灰になって霧散したかのように。左腕の袖が手首まで無くした分垂れ下がる。

「いいな。捧げ物を覚えたか？」

「生憎だな。これは数年前からやってるんだよ」

「悪魔、か。お前の呼び名だな。——ま、召喚数で言えば俺より上だろうが、殺して来た分では俺が上だろうけどなっ！」

和田教師が発狂したかのように震えた。すると葵によって倒された大蛇が和田教師の傍に寄り添った。何と砕かれた顎は元通り修復されていた。

「行けえ」と叫んだ和田教師の合図により大蛇が二人に突進する。

葵が身構えるが、零夜は冷笑を浮かべた。

「受け止める」

澄んだ声がした。どこまでも届きそうで、しかし叫んでもいない綺麗な声。

その直後、ズン！と屋上に地響きがする。葵が何かとそれを見た。そして驚いた。大蛇の動きが止められていた。あれほどのパワーを誇る大蛇を止めるのは、大蛇に負けない巨躯の化物だった。

まるでサイを二足歩行にさせたかのような外見だ。分厚い皮膚に太い腕。しっかりとした両足に、長い尾。二メートルを越す巨躯な身体に鋭い二つの双眸。大きい口の上の鼻先には長い角があった。

「一角獣。俺のパーティーの中で最高の力を誇る盾だ」

非現実的な光景だった。月光が注がれる屋上で、二体のモンスターが戦っている。大蛇を操るのは和田教師で、一角獣を操るのは幼馴染の零夜。

あの戦いを嫌い、暴力を使ってしまった自分に自己嫌悪した零夜が今。戦いに冷笑を浮かべている。とても信じられる現象ではない。それでも構わず、二人は戦った。最初は向かい来る大蛇を迎え撃つ形で一角獣が太い腕で大蛇を捕え、ラリアットをかました。強烈な一撃になるはずだったが大蛇はくねる身体で衝撃を殺して太い左腕に巻き付いた。締め上げ、腕を引き千切ろうと圧力を掛けて行く。しかし一角獣は痒くもない顔で大蛇を見下ろした。次に大蛇は口を開いて牙を突き立てる。それは失敗に終わった。一角獣のまるで岩のように硬い皮膚を、鋭い牙で貫けず、逆に牙を折ってしまった。

「ぐがつ！」

突然和田教師は悲鳴を上げた。口元を手で覆っている。

「ダメージのフィードバックか。あんな細かい牙でどうやって痛みを感じるのか。奇怪だな」

嘲笑を浮かべ、右腕を振るう。一角獣の左腕に巻き付いている大蛇をむんずと掴むと、容易く引き剥がしてしまった。さらにその勢いを利用して大蛇を床に叩き付ける。先程よりも強烈な地響きが屋上に響いた。まるで紐のように大蛇を振り回す一角獣の腕力は半端なく、屋上に穴を開け、大蛇を叩き落としてしまった。

忽ち和田教師の悲鳴が響く。言葉にならない悲鳴を上げ、両手で頭を掻き毟った。

「このお……このおっ！」

次は絶叫だ。本気で怒りを露わにしている。そして何もない所から白い塊が現れた。和田教師の叫びと同時に一角獣に襲い掛かり、なんと白い塊が変化した。大きな布のような形で胴体に巻き付き、拘束する。が、一角獣にも零夜の顔にも何も変化はない。寧ろ嘲笑っている。

「貧弱な拘束だな。———そうか、あのスーツもこれで作っていたのか。と、いうことはこれは変化形の奴だな」

面白そうに冷笑を浮かべた。すると一角獣の拘束が解けた。白い布は微塵に斬り裂かれ、霧散した。

「あああああああああああああああ」

狂った叫びを上げ、和田教師はその場に蹲った。まるで体全体を襲う痛みに悲鳴を上げているかのようなうた。

実際はそうなのだ。零夜や和田教師のようにモンスターのようなも

のを召喚するのが契約者と呼ばれ、それらを召喚出来る。しかし感覚がリンクしている。痛覚も同様で、今のように大蛇が叩かれ、白い塊が微塵に斬り裂かれたとなると同様の痛みが契約者に襲い掛かって来るのだ。

今攻撃を行ったのは零夜が新たに召喚したものだ。攻撃を終え、契約者の元に戻る。それは人間の姿に酷似していた。だが顔がない。服も着ていない。人形なのだ。それはマネキンを思わせる。ただその両手には剣があった。柄はない。腕と刃が同化している。

「両刃。速度が自慢の剣だ」

人形の両刃が零夜と葵を守る様に両手の剣を構え、前に出る。

「くそっ……二体召喚かよっ」

今更になって和田教師は焦り始めた。大蛇と変形形の白い塊がまったく通用しないということは、さらに力を込めるしかない。

「ぐおおおおおおおっ！」

方向する。和田教師の左手が零夜と同じように消えた。

「捧げ物を増やせば強くなる！そうだろ悪魔あつ！」

噛みつくように和田教師が叫ぶ。すると穴から大蛇が戻り、白い塊が隣に再構築された。その代わり和田教師は息を荒くし、どっと疲労が押し寄せたかのように顔を歪めていた。

「確かに対価を支払えば支払った分の力を引き出せる。だが、それは契約者の精神力次第だ。あちら側に体を持って行かれる際の激痛

それに耐えられる精神を養わなければ。そして耐えられたとしても引き出せた分の力を扱えるのか。——今持つて行かれたのは左手だけか。それと前々から持つて行かせた分。そこだな」

パチンと指を鳴らす。すると和田教師がその場で前に転倒した。何も無い所で、足を動かしていない状態で転んだのだ。

「両足の爪先、対価として持つて行かせたか。通りで自分は動かない訳だ。動けば転ぶ。隙を恐れたのだろうか？」

厭味つたらしく零夜が笑い、和田教師が大蛇に掴まって立ちあがる。そして己の足元を見た。影が広がり、元立っていた所から何かが突き出ている。手だ。影から黒い手が突き出ている。その手が和田教師を突き飛ばしたのだ。

黒い手は影に戻ると、影は和田教師の影から離れて単体で動いた。行きつく先は零夜の影だ。

「影に形はない。自由に変化出来る。俺の変化形だ」

「影の変化形だと？聞いた事がない」

「貴様よりも俺が強いつてことさ」

和田教師は啞然としていた。口を開き、呟く。

「三体同時召喚だと？……俺も二体が限界だったのに」

「それと気付いていると思うが、俺は左手だけ対価にした。これでこの戦力差。左腕全部を持つて行かせたら、どうなると思う？」

面白そうに零夜は言った。

「明らかになった戦力差。これは絶対的だ。もう戦況が引つ繰り返

ることはない。諦める」

三体の化物を従えて、零夜は葵の前に現れた。

約九年の間、零夜に何があったというのだ。一体都会で何をしたのか。

今までの激戦。葵よりも強くなって帰って来た。その絶対という領域は知らない。

これからどうなるのだ。今まで通り、一緒にいられるのか。またいきなりの別れを告げられるのか。

嫌だ。別れたくない。こんな終わり方をしたくない。葵は強く願う。

そして零夜の腕が指揮棒のように振り上げられ

！

非現実的な化物——悪魔と発狂者（後書き）

圧倒的な戦力を突き付け、絶対的な勝利を確信する。しかし戦いはそれだけでは終わりではなかった。闇が新たな闇を引き連れ、零夜の目の前に現れた——！

漆黒な柏手——疾風迅雷（前書き）

零夜が和田教師にとどめを刺そうとした。しかしまだ零夜の戦いは終わっていないかった…？

ゾクリ。と背筋に氷塊を入れられたような悪寒を感じ、咄嗟に零夜は振り上げていた右腕を降ろす。そして前を見た。零夜の後ろには葵もいる。葵も同じ悪寒を感じたのか、目を見開いていた。首の後ろがチリチリする。米神の血管が激しく脈打った。その事態に意識よりも身体が先に気付いていたのだ。動物本能の一つである恐怖。その恐怖による微かな破壊衝動。己を保つため何かを壊さなければならぬという選択。そうでもしなければ、この圧迫感のある空気に精神が吞まれ、押し潰される。自我が崩壊するかもしれない。それでも零夜は全身に力を入れ直した。一度脱力し、再び渴を入れる。指の先まで行き渡した。そして次に己を失いそうな葵の背後に回り、その背を右手で思い切り叩いた。

「ごふっ」

葵は背からの衝撃で咽返り、その場に唾液を吐いた。激しく咳込み、蹲るその背中を叩いた右手で優しく撫でる。葵が落ち着き、今まで通りの正常な心に戻るまで傍にいる。元々葵は精神が強い方だ。その分意識の回復も早い。今の状況を冷静に分析し、己を取り戻した。

「零ちゃん」

「ああ。…離れている」

零夜が葵の前に出る。それから三体を前に出し、戦闘態勢を取った。その対象は眼前の和田教師ではなく、その奥に鎮座する者だった。

「誰かと思えば、ああ、悪魔か」

澄んだ声がする。流水のように穏やかで、しかし何もない無という冷たさを感じた。敵意も殺気もない。だとすれば何者なのだろうと思っただ、今の悪寒は確実にこの者からだということは理解していた。それ故に難しい。次にどう出るか解らないのだ。対処しようと考えども、策がなければ意味がない。

「心地いい殺気がすると思って足を運んでみれば。ふふ、私は運が良いのかもしれんな」

声色からして男性だ。重みのある声は緊張感を生み、和田教師とは比べ物にならない程の威圧感を出している。そして心が読めない。零夜よりも完成度の高い無を冠するほどの無表情で零夜と葵を、ただ見ていた。睨んでいるのではない。観覧しているのでもない。ただ単にそこにあつた物に視線を向けているだけなのだ。故に感情も心も読めない。それは戦いに長けている葵も、さらに非常識的な戦いに慣れている零夜でさえも共通の難点だ。

「零ちゃんの知ってる人？」

零夜の後ろで身構える葵が、零夜の耳元で囁くように言った。しばらく零夜は考えた後、ゆっくりと頷いた。

「最悪だ。まさか幹部が来ているなんて」

言葉では悪態付いているようだが、顔はそう語っていないかった。むしろ嬉しそうに唇の端を釣り上げている。雰囲気だけでも領域が違う男性を目の前に、葵は本能的に逃亡を企てようとしたのだが、零夜は逃亡など考えもしない表情でさらに前に出た。

「状況としては最悪だが、俺にしてみればこんなに嬉しいことはな

い。なにせ、総合会の幹部が目の前にいるんだ。その首を取る絶好のチャンスじゃないか」

狂喜だった。葵もまさか言葉で「殺してやる」など幼馴染の口から出るとは思わなかったのだろう。思わず目を見開き、何を言っているのかもう一度聞き直すところだった。だがその前に男性が言う。

「勘違いをするものではない。私はこの出来そこないの後始末をしに、この場に赴いただけだ」

男性は立ち上がり、和田教師の傍に歩み寄った。和田教師は奥歯をカチカチ鳴らしながら後ろを振り向いた。ようやく月明かりが届く範囲まで歩み出た時、男性の顔が視認出来た。整った顔立ちで、年齢は二十五から三十代。皺一つない清潔感のあるスーツを着こなし、眼鏡を掛けている。外見で判断すのならば出来る会社員。何事にも冷静で、時には犠牲も必要だと判断する残酷な判断をするような、企業で必要とされるような人員。そんな顔をしていた。

和田教師は震えていた。後ろにいる男性は後始末と言った。それはまさに殺害を意味する。そうでなければ、あの狂った和田教師がここまで臆することはないだろう。そしてそれ以上に零夜を追い詰めた底力を向けても敵わない相手なのだ。

「た、助け———そ、そうだ！なあ今からあの餓鬼を俺が殺す！だからあんたはそこで見ててくれよ！俺があの餓鬼を噛み殺すところ、しっかりと見ててくれっ。だからいいだろう！なあ、殺さないでくれよぉ！」

和田教師は震えて力の入らない足でなんとか床を這い、男性の足にしがみ付いた。

「殺す？——あの悪魔を、か」

「そつだよ！俺が、俺が今から殺すからあつ」

すると男性は、和田教師を見下ろして笑った。少し唇を釣り上げた
だけだが、よしとしたのか。判断する前に和田教師は嬉々として立
ち上がった。

「よし！——おい悪魔あつ！俺が今からてめえをバラバラ
に噛み殺して——」

「笑止」

「——噛み殺してやつ」

和田教師の発言が中断した。原因は背後の男性にあった。パンと柏
手を打った途端、和田教師は床にへばり付いた。所々の骨がぐしゃ
ぐしゃに砕け折れる音と、血の塊を口から吐き出す音が同時にした。
咄嗟に零夜は葵の顔を引っ張り、自分の胸に押しつけた。音は聞い
てしまうが、見ない方がいい。葵は短く悲鳴を上げたが、それ以上
なにもなかった。なにもしないように踏ん張っていた。零夜のジャ
ケットを握り、小さく震えていた。

「見えない攻撃、か。流石総合会幹部。名を——
迅雷^{ジシライ}と言ったか」

「ほう。やはり私の名を知っていたか。悪魔にも知られているとは、
私も矜持と思えるものだな」

「冗談を言う物ではない。貴様の悪名は俺よりも誉れ高いだろうに」
「そつだったか？——いや、私には興味のないこと
だ」

男性——迅雷と呼ばれる男は足元に転がる、和田教師だ
った肉片を見た。鮮血が足元にも広がり、迅雷の革靴を汚した。そ

れでも迅雷はお構いなしといった態度でもう一步踏み出た。

「ふむ。無惨にも見るに堪えない醜惡な姿になったな。やはり下種は下種か」

いやお前がそうしたのだろう。と言える雰囲気でもなく、零夜はただ黙っていた。すると迅雷はもう一度柏手を打った。すると信じられないことが起きた。

「え…？」

葵はそれを見ていた。ショッキングな光景が、消えた。眼下に広がる血の海も、その中心に鎮座する肉片も、迅雷の革靴の爪先を汚していた血も、何もかもが消えていた。

「遣る事成す事、全てにおいて神速であるからというのが貴様の名の由来だったな。理解したぞ」

「これ如きで理解するのならば、悪魔よ、お前はまだ私の真価を知らぬまま朽ちるだけだ」

「まさか。俺もこれ如きの芸当で総合会の幹部に上り詰めたと思っ
てないさ」

「そうか。それはよかった」

なにがいいものか。と葵は思っていた。こんな時に水畑教師がいれば。と心で思う。しかし水畑教師は屋上から落ちて安否不明だ。そんな水畑教師に頼るのは間違っていると判断。今は零夜と自分で、いや、こんな非現実的な戦いで自分は活躍することはない。逆に足手まといになる。先程とは立場が逆転した。と状況を理解した。

「して悪魔よ。お前は本当に私と戦うつもりなのか？私の目的はこ

ここにはない。帰還したいのだが？」

「敵を目前にして余裕だな。俺という軍でも最高位の契約者を前にして、よくもそんな軽口を利けたものだ。いや、違うな。軽口は皆叩いていた。しかしその後、必ず叩き返したが」

「ほう。ならば私も、同じ末路を辿ると？滑稽な」

「試してみるか？」

零夜が右手を振るう。すると先程の三体が零夜の前に現れた。猛々しく咆哮を上げ、戦意を見せる。

「時間の無駄遣いだ」

「ぬかせ。愉しませてやるっ」

零夜の右手が横に振るわれる。直後に三体が迅雷に突進した。猛烈な勢い且つそれぞれのタイミングをずらしている。同時に受け止められないように、そして順番に受け流されないように一拍もない間をずらした。

しかしそれは失敗に終わった。

「一分だ」

迅雷が眩き、両手を打った。どこから来るのかと零夜は身構える。それはその直後だ。

「ぐうつ」

零夜が呻く。四肢が吹き飛ぶ激痛。そして前を見た。変化はあった。零夜の手持ちの三体の内、黒い影の変化体が消えていた。いや、消されていた。反動で後ろですぐ攻撃しようとしていた両刃と一角獣がタイミングを失い、攻撃を中断してその場で立ち止まる。

「一分で終わらせよう」

迅雷は初めて感情を浮かべた。微笑だ。しかし口の端が少し釣り上がっただけで、目が笑っていない。何も見ていない。眼中にないのだ。

微笑らしくない微笑を見た零夜が、冷笑を浮かべた。痛みから自棄になったのではない。一分と宣言したのならば、死んでも長引かせてやろう。子供の意地に似た、零夜の悪巧みだ。

「ならばっ！」

ふつと右手の人差指を持ち上げた。すると再び両刃と一角獣が動きだした。一角獣が巨躯な身体で迅雷に押し掛かるが如く両腕を広げて眼前に迫る。

「遅い」

迅雷は小さく柏手を打った。それだけで一角獣の動きが止まった。零夜にもダメージが行き届き、小さく呻く。一角獣は止まったのではない。攻撃されたのだ。

「ちいっ」

ダメージを押し退け、行動を優先する。両刃が動いた。迅雷の背後だ。

「ふん」

両腕を持ち上げ、柏手を打つ。両刃の動きも止まった。

「やはり形を崩さぬか。変化形よりかは頑丈だな。何より対応が早い。契約者の力量か」

迅雷は零夜を一瞥した。三度のダメージのフィードバックは先の戦いで傷ついた零夜の体を容赦なく叩いた。体力と意識が削り取られている。

「舐めやがって…」

零夜が左腕を右手で掴む。力一杯握り、迅雷を睨んだ。

「全て俺の力量だ。いつまでも調子に乗るんじゃないっ!」

叫ぶ。その直後にフワリと左腕の袖が宙に舞った。中の腕が無くなったかのように。

「まさか、まだ捧げるのか」

迅雷が呟く。零夜の冷笑が深くなった。零夜の左腕は無くなったかのようにではなく、無くなったのだ。三体を強化するために、さらなる対価を支払った。それが左腕という肉体だ。捧げる際には猛烈な激痛が襲うようで、零夜は「うぐっ」と小さく呻いた。

その直後、今まで空中で動きを止めていた一角獣と両刃が動きを再開する。

「む…」

一方迅雷も変化に気付き、顔には出していないものの警戒はしていた。どう動く?これが問題だ。今まで縛っていた二体が動きを再開

することは緊迫が緩み始めているということだ。一体どれほどの力を含めればここまで出来るのか。

「後がないな！そのまま一角獣と両刃に潰される！」

零夜の絶叫に呼応し、二体が緊迫を全力で打ち破った。もう縛るものはない。全力で迅雷という獲物を喰らう。二体は声ではない声で叫び、迅雷に迫った。

「詰めが甘い」

迅雷が静かに言う。そして再び、柏手を打った。至近距離からさらに距離を詰めた状態にある二体は、一度体を震わせ、力なく床に落ちる。

「ぐうう……」

ついに零夜も崩れた。力なく呻き、膝を床に付く。葵が顔を真っ青にして零夜を見下ろした。

勝った。迅雷はそう確信した。もう零夜に立ち上がる力はない。あったとしても立ち上がることもしか出来ない。立ち上がったって何が出る。これ以上捧げ物をしても無意味だ。

「結局は時間の無駄だったな。愉しみもない」

「———どうかな？」

「何？」

こんな状況になっても零夜は冷笑だけは崩さなかった。まっすぐに迅雷を見上げ、笑った。

「勝った。そう思っただろ？——どんな状況にあっても油断は禁物。油断大敵。戦いにおける初歩的な教え。それを今、アンタ忘れただろ。勝ちに酔いしれたな？」

「何が言いたい？」

「隙だらけって言っただよっ！」

右手を振り上げ、思い切り床を叩いた。すると、迅雷を中心に熱気が集中する。零夜が素早く葵に駆け寄り、後頭部を庇いつつ床に押し倒す。熱気を感じた直後、迅雷は爆発した。

「えっ、何？」

「最後の手段だ！これが効かなかったらどうしようもない！」

爆発に吞まれながらも葵は叫んだ。吹き飛ばされないように零夜にしがみつく。しかし爆発はそれほど大規模なものではなく、熱風はあまり届かなかった。

「爆発なんて……一体、何したの？」

爆発が収まり、煙が辺りを包み、視界が悪い時に話すことは的に位置を教えることになるが、葵は構わず言った。

「俺の変化形だ。初撃で消したと思い込ませ、隙を作った瞬間に奴の体に纏わせた」

「へ？」

「俺の変化形は影の様な物だ。影ならば目立たず移動出来る。空気中に煙の様に散ったり、肉眼では視認出来ない程薄く体を伸ばしたり、空気中で変化が可能になる。さらに爆発もな、変化形の体の一部を有爆体にすればあの程度の爆発は出来る。爆発も変化だ。だから

ら変化体にもダメージはない。俺がよく昔使っていた手だ」
「爆発って……」

葵が啞然としていると、煙が風に流されて視界が展開した。零夜が捧げ物にした左腕を庇いながら立ち上がり、次に何が起きるのかを警戒した。

そして見たのは、悪夢だった。煙の中から出て来たのは、所々焼かれて穴が開いたスーツを引き摺って出て来る迅雷だった。しかもダメージも傷も見受けられない。スーツだけボロボロになっているだけだった。

「成る程。まさか変化形にそのような使い方があるとはな。爆発、確かに愉しめた。だがそれだけだ」

少し零夜を認めた様で、今度こそ迅雷は零夜を見て笑った。だがそれは終わりを示している。傷を負い過ぎた今の零夜では、勝てない。打つ手がなくなったのだ。

万事休す。それは今の状況ではかなり意地の悪い言葉だった。

漆黒な柏手——疾風迅雷（後書き）

打つ手がない零夜。どうすると選択を強いられる中、意を決した葵が動いた。それを見た迅雷は意外な言葉を放った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3290k/>

The End Of Contract

2011年2月3日15時06分発行